金沢市文化財紀要 322

石川県 金沢市

畝田・寺中遺跡XIV

－木曳野遺跡群XII－

平成 31 年 3 月
(2019年)

金　　沢　　市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県 金沢市

畝田・寺中遺跡XIV

－木曳野遺跡群XII－

平成 31 年 3 月
(2019年)

金　　沢　　市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例　　言

1．本書『畝田・寺中遺跡XIV』は、石川県金沢市寺中町・畝田西４丁目・桂町地内に所在する事業名称木曳野遺跡群（寺中B遺跡、桂町南遺跡、畝田・寺中遺跡）の発掘調査報告のうち、平成16年度に実施した畝田・寺中遺跡の調査の一部について報告するものである。

2．本調査は金沢市木曳野土地区画整理組合による土地区画整理事業に伴い、平成16年度に金沢市埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したものである。

3．本報告にかかる現地調査は金沢市埋蔵文化財調査委員会（当時：会長橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修司氏、横山方子氏）の指導の下で、庄田知充（文化財保護課主事：当時）が担当した。

4．本書の執筆・編集は谷口宗治（文化財保護課担当課長補佐）が担当した。写真撮影は遺構を発掘調査担当者が行い、遺物を谷口明伸（文化財保護課主査）が行った。

5．本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。

⑴　方位は全て磁北である。座標は世界測地系（第Ⅶ系）に基づき設定している。

⑵　各図の縮尺は、遺物は１/３、遺構は１/40が主であるが、各図に指示しているとおりである。

⑶　遺物実測図の番号は通し番号とし、本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。

⑷　遺構名の略号は、SD＝溝・川跡、P＝ピットなどである。

⑸　土器については「壺」・「甕」・「高杯」・「器台」などと表記するが、用途を示すのではなく、形態による分類で「壺形土器」などの略称である。

6．本書に収録した遺物、現場図面、測量図葉、写真台帳等はすべて金沢市埋蔵文化財センター及び金沢市埋蔵文化財収蔵庫で一括して保管している。

畝田・寺中遺跡XIV　目次

第１章　調査箇所と内容の報告……　1
　第１節　調査箇所と既往の報告内容
　第２節　本書の報告について

第２章　遺跡の位置と環境……　3
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境

第３章　検出遺構と遺物……　5
　第１節　調査区の概要
　第２節　建物遺構と出土遺物
　第３節　井戸・土坑と出土遺物
　第４節　溝と出土遺物

第４章　自然化学分析……　40
　木曳野遺跡群から出土した木製品の樹種

第５章　総括……　41
　第１節　畝田・寺中遺跡の時期別の様相について

写真図版

第１章　調査箇所と内容の報告

第１節　調査箇所と既往の報告内容

今回報告する畝田・寺中遺跡の発掘調査は、金沢市木曳野土地区画整理事業に伴い実施されたもので、事業全体では平成14年度から平成16年度にかけて、約13,760㎡の発掘調査が行われている。遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの詳細な経緯は既刊「木曳野遺跡群Ⅰ」を参照願いたい（金沢市2006）。

本事業による調査箇所は第１図のとおりである。調査時には、補助事業主体の名称として県費分A～C区、道路名称によって主幹線１～５区、支線部などと呼称して調査を実施している。既刊報告書の報告内容との対応については第１表および第１図のとおりである。

木曳野遺跡群Ⅰ（以下Ⅰ、Ⅱ等とする）では、調査に至る経緯や縮尺１/300、１/100の遺構平面図版と共に植生や環境復元、木材・石材利用の把握のための自然科学分析結果を掲載している。

Ⅱでは、寺中B遺跡と畝田・寺中遺跡内の桂・寺中遺跡として調査を実施した箇所の調査成果を掲載している。

Ⅲでは、桂町南遺跡と畝田・寺中遺跡の県費分A～C区の調査成果を掲載している。また、畝田・寺中遺跡の桂・寺中遺跡部分を除いた、縮尺１/500の畝田・寺中遺跡図判が別紙で用意されている。

Ⅳでは、畝田・寺中遺跡の主幹線１区と２区のSD222、SD303（大河跡）の調査成果を掲載している。

Ⅴでは、畝田・寺中遺跡の主幹線３区と調査成果と１区SD222、包含層、２区P20、SD222、SD240、SD244、SD303、４区大河跡出土の墨書土器を掲載している。

Ⅵでは、畝田･寺中遺跡の主幹線２区における遺構及び土器･陶磁器、石製品について報告している。

Ⅶでは、畝田・寺中遺跡の主幹線４区の遺構及び遺物、及び既に報告済みの調査区の出土遺物で掲載漏れのあった遺物について補遺として報告している。

Ⅷでは、畝田・寺中遺跡の主幹線４区の遺構及び遺物を掲載している。

Ⅸでは、主幹線５区の遺構及び遺物を掲載している。

Ⅹでは、東工区南北線の遺構及び遺物を掲載している。

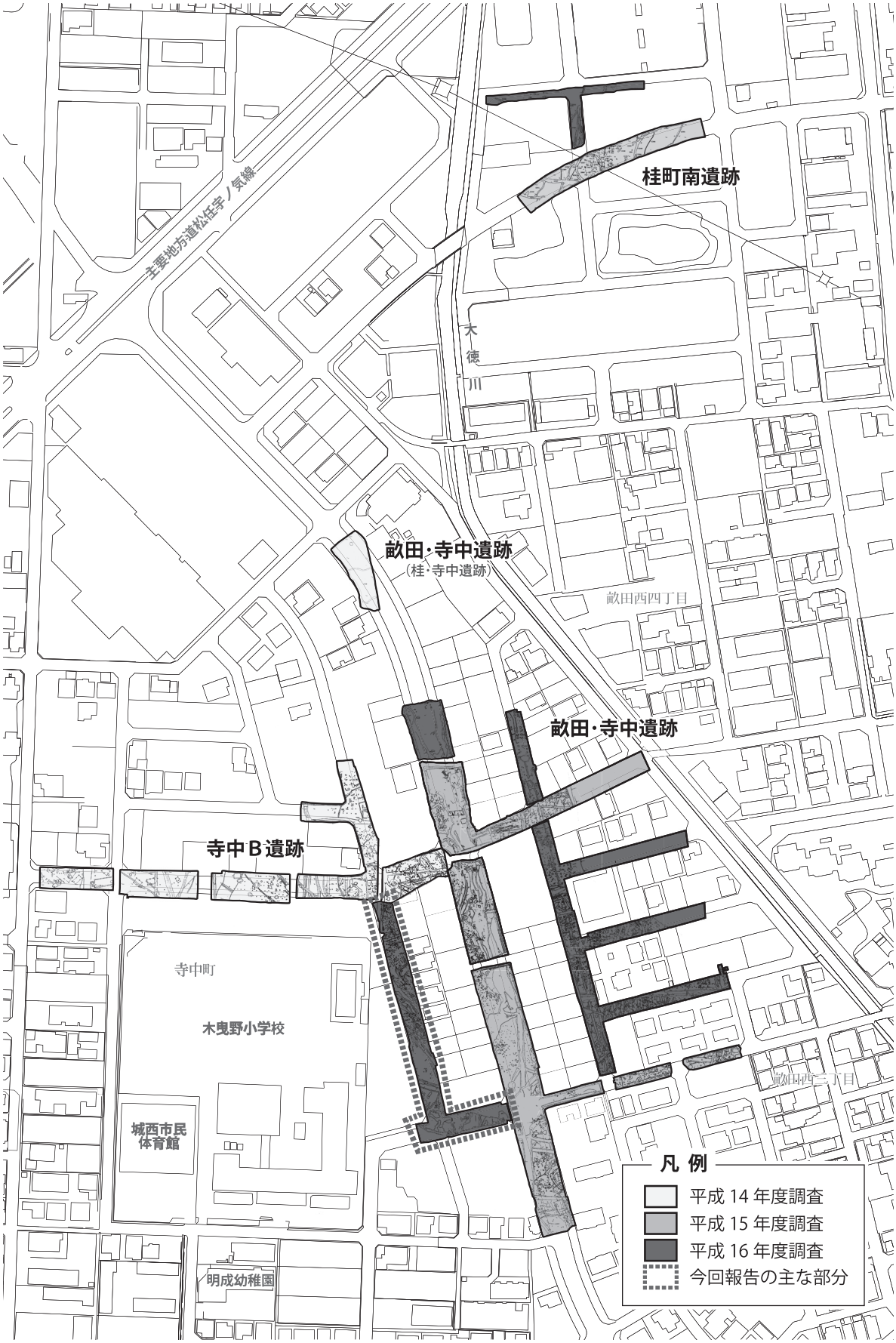
Ⅺでは、東工区東西線の遺構及び遺物を掲載している。

第２節　本書の報告について

本書は西工区とした街区道路についての報告である。

第１表　報告書の内容

紀要No.		書名	内容	発行年
231	木曳野遺跡群Ⅰ	寺中B遺跡Ⅵ　桂町南遺跡Ⅰ　畝田・寺中遺跡Ⅲ	調査に至る経緯、経過、航空測量、自然化学分析	2006
239	木曳野遺跡群Ⅱ	寺中B遺跡Ⅶ　畝田・寺中遺跡Ⅳ	寺中B遺跡（報告完）桂・寺中（畝田・寺中）遺跡	2007
249	木曳野遺跡群Ⅲ	桂町南遺跡Ⅱ　畝田・寺中遺跡Ⅴ	桂町南遺跡（報告完）畝田・寺中遺跡（県費A・B・C区）	2008
259	木曳野遺跡群Ⅳ	畝田・寺中遺跡Ⅵ	畝田・寺中遺跡（主幹線１区・２区SD222、SD303）	2010
279	木曳野遺跡群Ⅴ	畝田・寺中遺跡Ⅶ	畝田・寺中遺跡（主幹線３区・２区墨書土器［１区・４区含］）	2012
288	木曳野遺跡群Ⅵ	畝田・寺中遺跡Ⅷ	畝田・寺中遺跡（主幹線２区・土器・陶磁器・石製品）	2013
293	木曳野遺跡群Ⅶ	畝田・寺中遺跡Ⅸ	畝田・寺中遺跡（主幹線４区、主幹線２区木製品・金属製品）	2014
299	木曳野遺跡群Ⅷ	畝田・寺中遺跡Ⅹ	畝田・寺中遺跡（主幹線４区支線部）、自然化学分析	2015
304	木曳野遺跡群Ⅸ	畝田・寺中遺跡Ⅺ	畝田・寺中遺跡（主幹線Ⅴ区）	2016
307	木曳野遺跡群Ⅹ	畝田･寺中遺跡Ⅻ	畝田･寺中遺跡（東工区南北線）	2017
315	木曳野遺跡群Ⅺ	畝田･寺中遺跡XIII	畝田･寺中遺跡（東工区東西線）	2018
322	木曳野遺跡群Ⅻ	畝田･寺中遺跡XIV	畝田･寺中遺跡（西工区）、自然化学分析	2019



第１図　調査区位置図〔S＝１/30,000〕

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

畝田・寺中遺跡は石川県金沢市畝田町、寺中町地内に所在する。

石川県は日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられ、金沢市は加賀地方の北部に位置しているが、その西部は日本海に接し、南東部には海抜1,500mを超える山地をかかえる。この山地からは、市域を西流浅野川と犀川が流れ、両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金腐川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は手取川が形成する扇状地の北辺である。

第２図　石川県と金沢市の位置

本遺跡は市内の北西部、現在の海岸線からは約２km内陸側に位置しており、周辺は海岸線に沿って南北に延びる内灘砂丘の後背湿地を形成している。また、南側を西流する犀川からの分流が本地域を北流し、北側を西流する大野川へと流れ込むことから、ますます湿潤な環境を形成している。

第２節　歴史的環境

畝田・寺中遺跡の周辺に分布する遺跡を時代毎に概観すると、縄文時代には後期中葉と晩期後葉の松村A遺跡(59)や晩期の土器・石器が出土する本遺跡があり、近岡遺跡(46)では昭和45年の調査で花粉分析から縄文晩期の農耕について話題になった。弥生時代は戸水B遺跡(20)、戸水C遺跡(47)、藤江C遺跡(21)などで前期からの遺物が確認されており、畝田C遺跡(13)などで遠賀川式土器が出土しているが、中期以降増加する傾向にあり、西念・南新保遺跡(29)のような後期へ繋がる拠点的集落も出現する。本遺跡においては、中期から遺物が確認されている。古墳時代は弥生終末期の遺跡が継続されることが多いが、中・後期になると激減し、本遺跡の他、周辺では藤江B遺跡(63)で確認できる。当該期の須恵器を多く確認している本遺跡や藤江C遺跡などが中・後期の拠点的集落になる可能性があり、本遺跡に関しては弥生時代終末から７世紀まで継続して確認できる稀有な遺跡である。

奈良・平安時代は再び遺跡が広く分布し、犀川や大野川河口周辺に津湊関連遺跡や官衙・荘園関連遺跡が出現する。本遺跡においても８世紀前半から中頃の大規模集落が確認され、遺構の規模や「津司」墨書土器から金石本町遺跡と一連の港湾関連遺跡と考えられている。また、石川県調査区から遣渤海使が帰国した「天平二年(730)」の記年銘墨書土器が出土しており、その際の饗応に使用された可能性が指摘されている。また、近隣の畝田ナベタ遺跡(17)からは大陸産とされる青銅金箔張の帯金具(巡方)が出土しており、具体的な大陸との交流を物語る遺跡群といえる。鎌倉・室町時代は、本遺跡も含めて当該期の遺跡が広く分布している。本遺跡では、堀で囲繞された方２町×１町半程度の空間が検出されている。南新保北遺跡(44)では銭の出納に関わる付札木簡が出土している。戸水C遺跡は古代以来の津湊関連遺跡として評価されている。

本遺跡は、大野荘湊を含む大野荘内(一時期は富永御厨内か)に所在する。畝田地名の初見は日本霊異記「大野郷畝田村」であり(1998)、平安時代にはその名が認められる。中世には「宇禰田村」、「宇根田村」、「宇祢田村」、「うね田村」などとみえる。

1	**畝田・寺中遺跡**	**（弥生～中世）**
2	畝田遺跡	（縄文～平安）
3	畝田大徳川遺跡	（縄文～室町）
4	桂町南遺跡	（弥生～中世）
5	無量寺Ｂ遺跡	（古墳）
6	無量寺遺跡	（古墳・中世）
7	桂遺跡	（弥生・古墳・中世）
8	寺中Ｂ遺跡	（縄文～平安）
9	寺中遺跡	（弥生）
10	金石本町遺跡	（弥生～平安）
11	寺中御台場跡	（江戸）
12	畝田Ｂ遺跡	（弥生～平安）
13	畝田Ｃ遺跡	（縄文～平安）
14	無量寺Ｄ遺跡	（弥生～平安）
15	無量寺Ｃ遺跡	（奈良・平安）
16	畝田・無量寺遺跡	（弥生・奈良・平安）
17	畝田ナベタ遺跡	（奈良・平安）
18	御館前遺跡	（不明）
19	戸水大西遺跡	（奈良・平安）
20	戸水Ｂ遺跡	（弥生・平安）
21	藤江Ｃ遺跡	（弥生～室町）
22	戸水ホコダ遺跡	（弥生～平安）
23	大友西遺跡	（弥生・古墳・平安）
24	戸水・大友遺跡	（奈良・平安）
25	南新保Ｅ遺跡	（弥生～鎌倉）
26	南新保Ｃ遺跡	（古墳前期）
27	南新保三枚田遺跡	（弥生～平安）
28	二ツ屋町遺跡	（弥生・平安）
29	西念・南新保遺跡	（弥生～平安）
30	南新保Ｄ遺跡	（弥生～平安）
31	南新保Ｂ遺跡	（弥生）
32	西念東遺跡	（弥生）
33	直江ボンノシロ遺跡	（縄文～室町）
34	大友Ｆ遺跡	（弥生～平安）
35	大友Ａ遺跡	（古墳・奈良・平安）
36	大友Ｄ遺跡	（弥生・平安）
37	直江ニシヤ遺跡	（古墳～室町）
38	大友Ｅ遺跡	（弥生～室町）
39	近岡カンタンボ遺跡	（弥生～奈良）
40	直江西遺跡	（弥生～古墳）
41	直江中遺跡	（縄文～室町）
42	直江北遺跡	（縄文～室町）
43	近岡テラダ遺跡	（弥生・平安～室町）
44	南新保北遺跡	（古墳～中世）
45	近岡ナカシマ遺跡	（弥生・奈良・平安）
46	近岡遺跡	（縄文～室町）
47	戸水Ｃ遺跡	（縄文～中世）
48	無量寺金沢港遺跡	（縄文～古墳）
49	金石北遺跡	（不詳）
50	普正寺番屋砂丘遺跡	（縄文・奈良・平安）
51	普正寺遺跡	（鎌倉・室町）
52	普正寺高畠遺跡	（古墳・鎌倉）
53	寺中町南遺跡	（古墳）
54	観音堂Ｂ遺跡	（弥生～室町）
55	観音堂遺跡	（弥生）
56	松村西の城遺跡	（古墳・平安）
57	松村平田遺跡	（弥生中期）
58	松村寺の前遺跡	（室町）
59	松村Ａ遺跡	（縄文・古墳・鎌倉・室町）
60	松村どのまえ遺跡	（弥生中期）
61	松村Ｂ遺跡	（縄文・弥生・江戸）
62	松村高見遺跡	（弥生中後期）
63	藤江Ｂ遺跡	（弥生～平安）
64	二口六丁Ｂ遺跡	（弥生・古墳）
65	二口六丁Ａ遺跡	（弥生・古墳）
66	西念ネジタ遺跡	（弥生・古墳）
67	西念クボ遺跡	（縄文・古墳）
68	二口シミズ遺跡	（弥生・古墳）
69	二口町遺跡	（弥生・古墳）
70	藤江Ａ遺跡	（奈良・平安）
71	北町遺跡	（縄文）
72	御館前遺跡	（不詳）
73	桜田・示野中遺跡	（弥生・平安）
74	出雲じいさまだ遺跡	（古墳～室町）
75	薬師堂遺跡	（弥生～平安）
76	若宮遺跡	（室町）
77	犀川鉄橋遺跡	（縄文～古墳）
78	玉鉾Ｂ遺跡	（奈良・平安）
79	佐奇森遺跡	（弥生・平安～江戸）
80	専光寺染色団地遺跡	（古墳）
81	専光寺養魚場遺跡	（古墳～平安）
82	赤土遺跡	（弥生）
83	吉藤専光寺跡	（室町）
84	豊穂遺跡	（奈良～室町）
85	稚日野遺跡	（縄文・古墳）
86	袋畠・北塚Ｃ遺跡	（古墳～平安）
87	北塚Ｂ遺跡	（平安）
88	北塚Ａ遺跡	（縄文・弥生・平安～室町）
89	北塚古墳群	（古墳）
90	古府カタガリ遺跡	（弥生・平安）
91	古府クルビ遺跡	（弥生～平安）
92	古府Ｂ遺跡	（不明）
93	高畠遺跡	（弥生・古墳）

第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡分布図〔Ｓ＝１/30,000〕

第３章　検出遺構と遺物

第１節　調査区の概要

西工区概要：平成16年度の調査は前年度までに実施した主幹線２区から５区の西側30mの地点を併走する区画道路予定地について実施したものである。同年度には東工区も実施しており、区分するため西側の地点については西工区とした。西工区は主幹線に接続し、東西方向に展開する部分と、これに直行し南北に展開する道路で構成される。それぞれの遺構の位置については東西にアルファベットを付し、南北に数字を設けて表す10m四方を単位とするグリッド番号を用いた。

第２節　建物遺構と出土遺物

建物の報告は、先に刊行した報告書中の分類を踏襲する。柱穴の並びが方形、或いは長方形に配置される建物跡を掘立柱建物として報告する。平地式建物跡、側柱建物と総柱建物とに区分できる。今次報告では７棟について報告する。

SB301（図版５）　T15−U14にて検出。SD319を外周溝、SD320を内周溝とする平地式建物跡である。柱穴としてSP309とSP310が確認できる。１間×１間の建物跡で、SK307をSD320の続きとみると、南側に出入り口のある建物跡となる。SP309とSP310の間隔は2.8mを測る。方位は磁北より11°東に振る。SB305・SB307とあわせ、平地式建物が展開する区域にあるものとみられる。弥生時代終末から古墳時代前半頃の建物跡とみられる。

SB302（図版６）　T16−T15にて検出。東西にSP358・SP322・SP323の２間3.8m、南北にSP358・SP321・SP327の２間3.5mを測る正倉型総柱建物跡だが、P334を北列に含めると東にさらに伸びる総柱建物跡とみられる。方位は磁北より61°東に振る。柱穴は略円形を呈し、直径にばらつきがある。

SB303（図版５）　T16にて検出。柱列を溝状に掘り込む布掘建物跡である。南北に１間2.8m、東西に4.2mを測る。SB304・SB506と切りあう。南側の柱列は東西の端で柱穴上に落ち込むが、深さ0.25mの溝状で検出した。北側の柱列は東のSP347−１・SP347−２からSP348、SP349と並ぶ２間で３本の柱を有し、幅0.5mの溝状を呈する。SP348とSP349の断面で柱痕跡跡と推測される縦に分層される土色を確認した。方位は磁北より85°西に振る。弥生時代後期に属する倉庫型建物とみられる。

SB304（図版７）　S16−T16にて検出。南北にSP345・SP330の１間3.8m、東西にSP351・SP344・SP345の２間4.6mを測る側柱建物跡である。柱穴の掘方は略円形を呈し、深さ0.4mと深い。方位は磁北より68°西に振る。

SB505（図版６）　S17−T17にて検出。南北にSP387・SP386・SP385・SP378の３間3.8m、東西にSP387・SP389・穴の２間３mを測る正倉型側柱建物跡である。SD327で囲む区画に配した建物跡か。方位は磁北より27°東に振る。

SB506（図版６）　S16−T16にて検出。南北にSP343・SP341・SP339の２間3.3m、東西にSP326・SP330・SP339の２間3.5mを測る正倉型総柱建物跡である。柱穴の掘方は略円形を呈し、深さ0.5mと深い。方位は磁北より41°西に振る。

SB507（図版５）　T17−T16にて検出。南北にSP377・SP366の１間2.9m、東西にSP377・SP381・SP382の２間4.5mを測る側柱建物跡である。柱穴の掘方は略円形を呈し、深さ0.3mを測る。方位は磁北より40°東に振る。

第３節　井戸・土坑と出土遺物

SE301（第８図）　Ｘ７にて検出。東西に長いやや歪んだ楕円形を呈する。東にSD302が隣接する。掘方は長軸2.3m、短軸1.7m、深さ0.7mを測り、逆台形を呈し中央に井戸枠が残る。井戸は長軸に0.9mを測る樋状に繰り抜いた木材を縦に２本対面に配し、長楕円形の井戸枠とする。井戸枠下より井戸底に用いた横に敷いた板材の一部が残欠する。井戸枠の内外で堆積土砂に差異があり、逆台形の掘方内に差して築造したものか。枠内の体積土砂中には炭化物の混入が認められる。古墳時代前期の壺（１・２）と和泉陶邑窯の編年（以下、編年記号を用いる）での古墳時代TK47～MT15型式の坏蓋（４・５）坏身（６）、古代Ⅳ期の坏身（８）が出土している。

SK304・SK305・SK306（第８図）　U12にて検出。それぞれ略長方形を呈し、類似した土坑である。掘方の周囲が溝状に一段落ち込み、中央はやや高い。SD311の軸に合わせ３基が連なり、それぞれの間隔は１ｍを測る。上面形態は隅丸方形を呈する掘立柱建物の柱穴に酷似するが深さはそれぞれ0.1m内外と極めて浅い。

SK308（第８図）　T14にて検出。略円形を呈する。西にSD317が位置する。SK312と一部切り合う。長軸1.2m、短軸1.1m、深さ0.9mを測る。掘方は円筒形を呈し、素掘りの井戸か。覆土は粘土と粘性土による水平体積により概ね３層を形成する。古墳時代中期の甕（９）、古代Ⅳ期の坏身(11)や磨製石斧(12)などが出土している。

SK315　T15にて検出。SD323の北に位置していたが、調査の進捗により滅した。SD323の延伸部分か。古墳時代前期の高坏脚部(13)が出土している。

SK317　S18・T18にて検出。東西に長い長楕円形を呈する。東に溝状に伸び、SD329に接続する。長軸4.5m、短軸2.2m、深さ0.15mを測り、堀方は浅い皿形を呈する。古墳時代前期の有段擬凹線甕口縁(15)や内外面を赤彩した蓋(14)が出土している。

SK320（第８図）　S18にて検出。南北に長い歪んだ長楕円形を呈する。長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.1mを測り、堀方は浅い椀型を呈する。概ね２層にされるが、北側に柱穴上の落ち込みが観察され、布留系の甕(17)など古墳時代前期の遺物が出土している。

SX301（第７図）　Ｗ６・Ｗ７にて検出。南北に長い長楕円形を呈し、南へさらに伸びている。南北に８ｍ、東西に６ｍ、深さ0.8mを測る。複数の小規模な土坑が切りあう。胴部外面に右斜めの斜条痕を施すものは縄文晩期の粗製深鉢(22)で、断面で輪積痕が確認できるものは古墳時代の壺の口縁部(21)である。

第４節　溝と出土遺物

SD301（第７図）　Ｙ７にて検出。南北に展開するとみられるが、不定形な形を呈し、北側でSD303と切りあう。幅7.5m、深さ0.3mを測る。

SD302（第７図）　Ｘ６・Ｘ７にて検出。SD301の西に位置する。南北に展開するとみられ、北側でSD303と切りあう。幅８ｍ、深さ0.5mを測る。主幹線２区で検出したSD240と同一の溝か。古墳時代前期から中期の土師器(23～39)と古墳時代の須恵器(40・41)古代の須恵器(42～44)と出土しているが、主体は前者であろう。24の壺・25の甕は外面にヘラ削り調整が確認でき、小型土器(34～38)は祭祀関連のものか。

SD303　Ｙ７・Ｚ７にて検出。東西に展開する溝で主幹線の大川跡が湾曲し大きく幅がある地点か。北壁でおよそ21mにわたり広がりSD301・302と切りあう。深さ0.4mを測る。古代Ⅲ～Ⅳ期の須恵器(45・46)や珠洲焼(48)が出土している。

SD304(第６図)　Ｕ６・Ｖ６にて検出。東西に展開、幅1.5m、深さ0.2mを測る。49と50は同一物とみられる古墳時代前期の内外面を磨く壺、51は古代の横瓶の端部か。

SD305　Ｕ８・Ｖ８にて検出。東西に10mで直角に曲がり、南北に９mにわたり展開し、北にSD306が並行する。最大幅0.8m、深さ0.1mを測る。建物跡の区画溝か。

SD306　Ｕ９・Ｖ９にて検出。SD304と同じ軸を有する。幅２m、深さは掘方に段差があり、深い部分で0.3mを測る。古代Ⅳ期の坏身(52・53)が出土している。

SD307　Ｖ９･V10にて検出。東壁より北西方向へ展開し､SD308と並行する。幅0.9m､深さ0.2mを測る。TK43型式の坏蓋には溶着した破片が認められる。

SD308　T12・U12・U11・V10にて検出。南東より北西へ展開し、SD311やSD314・SD317と並行する。幅２～2.5m、深さ0.5mを測る。集落の周溝の類か。古墳時代前期から中期にかけての土師器と須恵器、古代Ⅳ期に属する須恵器などが出土している。弥生時代終末の有段擬凹線甕(60)が月影式期と最古相を示し、布留系のくの字甕(62～66・68)、山陰系の二重口縁壺(71・72)がこれに続くもので量比的には古墳時代前期が主を占める。77は把手状の装飾を持つ無頸壺で、高坏・器台(89～97)はやや古相を示すものが多い。須恵器では大型の甕(101)、瓿或いは長頸壺とみられる頸部(102～104)のほか、TK23～TK43型式の坏身坏蓋が出土し、TK23が112、TK47が105・113～116、MT15が109～111、TK43が107となる。126は古代Ⅳ期の横瓶で一方の端部にカキ目が残る。124は高松産の鉢で金属器を模したものか。127は穿孔を施す角杯の先端部で､志賀町中村畑遺跡B地区上層出土品中に類例がある。

SD310　U11・U12にて検出。SD308とSD311の間に位置する。南北方向に広がる溝で、SD308よりの派生とみられ、北で地山と同化する。最大幅2.6m、深さ0.1mを測る。古墳時代の瓿胴部(132)と古代Ⅳ期の坏身(133)が出土している。

SD311(第６図)　U12にて検出。SD313と切りあい、SK304～SK306はこの溝に沿う。南東より北西に展開し､SD314に合流する｡幅0.8m､深さ0.2mを測る｡古墳時代前半の内外面ハケ調整のくの字甕(134)、有段口縁甕(135)外面を赤彩した短頸壺(136)があり、須恵器では140の坏身がMT15、138のTK43型式が出土している。

SD313　U11・U12にて検出。東西に展開し、SD310・SD311と切りあう。幅0.8m、深さ0.2mを測る。Ⅲ期～Ⅳ期の須恵器坏底部(141)が出土している。

SD314(第６図)　T13・U13・U12にて検出。南東から北西に流れる溝で、SD308とSD317に挟まれる。西で大きく広がり、最大幅２m、深さは0.5mを平均とし、最深部で0.7mを測る。内面を黒色処理した土師器椀(142)などが出土している。

SD317(第７図)　西T14・V13にて検出。SD314とほぼ並行する。幅は４～５m、調査区の中央部が最も深く、0.8mを測る。溝の最下層に多く遺物を含む。生時代終末から古墳時代中期にかけの土師器が出土している。甕類(152～164)は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての有段擬凹線甕(152～155)とこれに付随する有段甕(156)、山陰系の頸部に凸帯を巡らす大型の甕(157～159)、布留系のくの字甕(162～164)、口唇部に面取りを持たぬくの字甕(160・161)などこの時期の甕の内容を看取できる。壺類では口縁部に装飾を施す166は東海系のパレス壺で、172は口縁部に縦の貼付凸帯を２本貼る。外面を赤彩した加飾壺類では大型の二重口縁壺(174)のほか、直口壺(176)、有段壺(177)、無頸壺(180)などがある。高坏･器台は内外面に赤彩を施す器台(201)と受部に類滴状の透かしを施す装飾器台(203･204)が月影式期と古相を示し、受け部が椀状を呈する高坏(206)がこれに続き、内面を黒色処理する古墳時代中期のもの(207)は台付椀の様相を呈す。小型器台(215～217・219)では三方透が主となる。壺類に供されていた蓋(188・189)のほか、小型土器類(182～185)など内容は多岐に及ぶ。石器では敲

石(196・197)、打製石斧(198・226)、砥石(199・200)、玉類の加工過程と推される石核(225)、破断した磨製石斧を敲石へ転用したもの(227)などがある。石材表面に細い線条痕がつくもの(228)は金属製品の刃部等を研磨する際についたものか。須恵器では古墳時代(229～243)と古代(246～249)が出土し、TK47(233・235)、MT15(229・230・232・234)TK43(236・237)TK43～TK209(231)型式に区分される。238～241もTK47～TK43に属す壺類で、238は瓶とみられ、胴部に穿孔を有し板状工具で連続刺突を巡らせる。239の壺は口縁部に波状文、胴部に連続刺突文を巡らせ、240は胴部に条痕文を施す。246～248は古代Ⅳ期の坏身類である。

SD318　V13にて検出。SD317に並走する小規模な溝である。U13付近でSD317と合流、SD317の北岸にみられる平坦部として伸びる。東壁付近で最大幅1.5m、深さは0.4mを平均とするが、深い地点では0.8mを測る。弥生時代後半から古墳時代前期の土師器(250～257)が出土している。口縁部が受口状を呈し底部は平底である甕(250)は弥生時代後期から終末期にかけての過渡期にあるもので、ほかは古墳時代前半(251～256)である。

SD319　T14・T15にて検出。平地式建物SB301の外周溝である。幅0.4m、深さ0.1mを測る。内面を黒色処理した土師器椀(148)が出土している。

SD320　V14にて検出。SK307として調査したもので、事後平地式建物SB301の内周溝であるSD320の東への延伸部と判断した。

SD322　T15にて検出。SD317・SK308方向より北西にかけ広く落ち込む。平地式建物SB301の外周溝SD319に隣接し、SD317の北に位置する。SB301隣接地点で幅1.5m、深さ0.05mを測り、北西で大きく広がる。胴部下半分にロクロでケズリ調整を施す長頸壺(259)、MT15(261)、TK10(262)、TK43(263～265)の坏身蓋のほか、同時期に属する有台坏(267)、古代Ⅳ期の坏身(268･269)、長頸壺(260)がある。

SD323　T15にて検出。SD322とSD319と切りあい、幅0.9m、深さ0.1mを測る。古代の高坏脚部(149)が出土している。

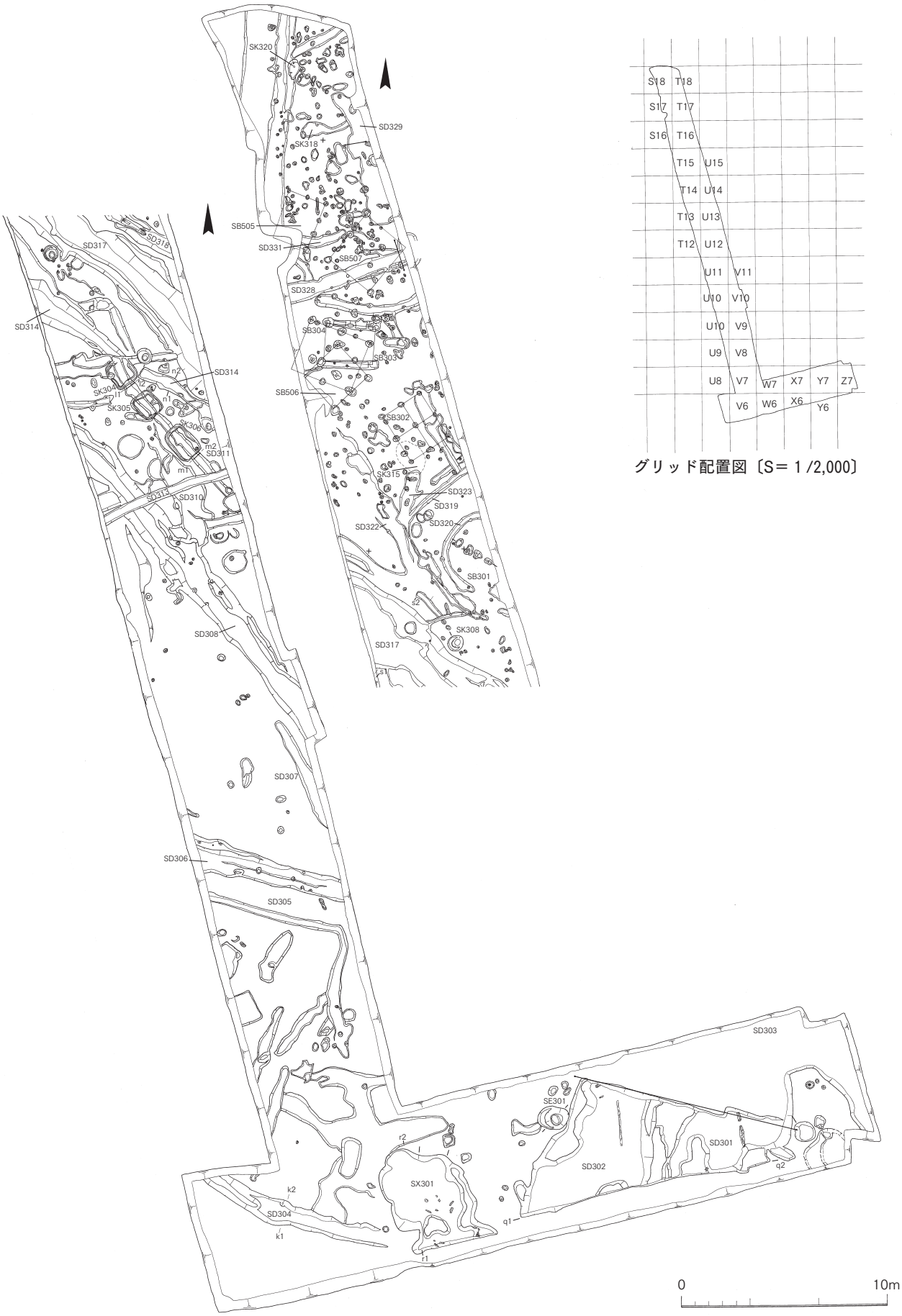
SD327　T16にて検出。SB303の北に位置する。南に円弧を描き、西はSD328付近で途切れる。幅0.7m、深さ0.5mを測り、覆土は概ね3層に区分される。

SD328(第8図)　S16・T17にて検出。東西に流れる溝である。幅1.5m、深さ0.3mを測る。覆土は概ね4層に区分される。古墳時代初頭の二重口縁の壺(150)が出土している。

SD329(第8図)　T17・T18にて検出。東側が調査区外で、幅1.5mを超え、深さ0.1m未満の浅い落ち込みを呈する。土錘(151)が出土している。

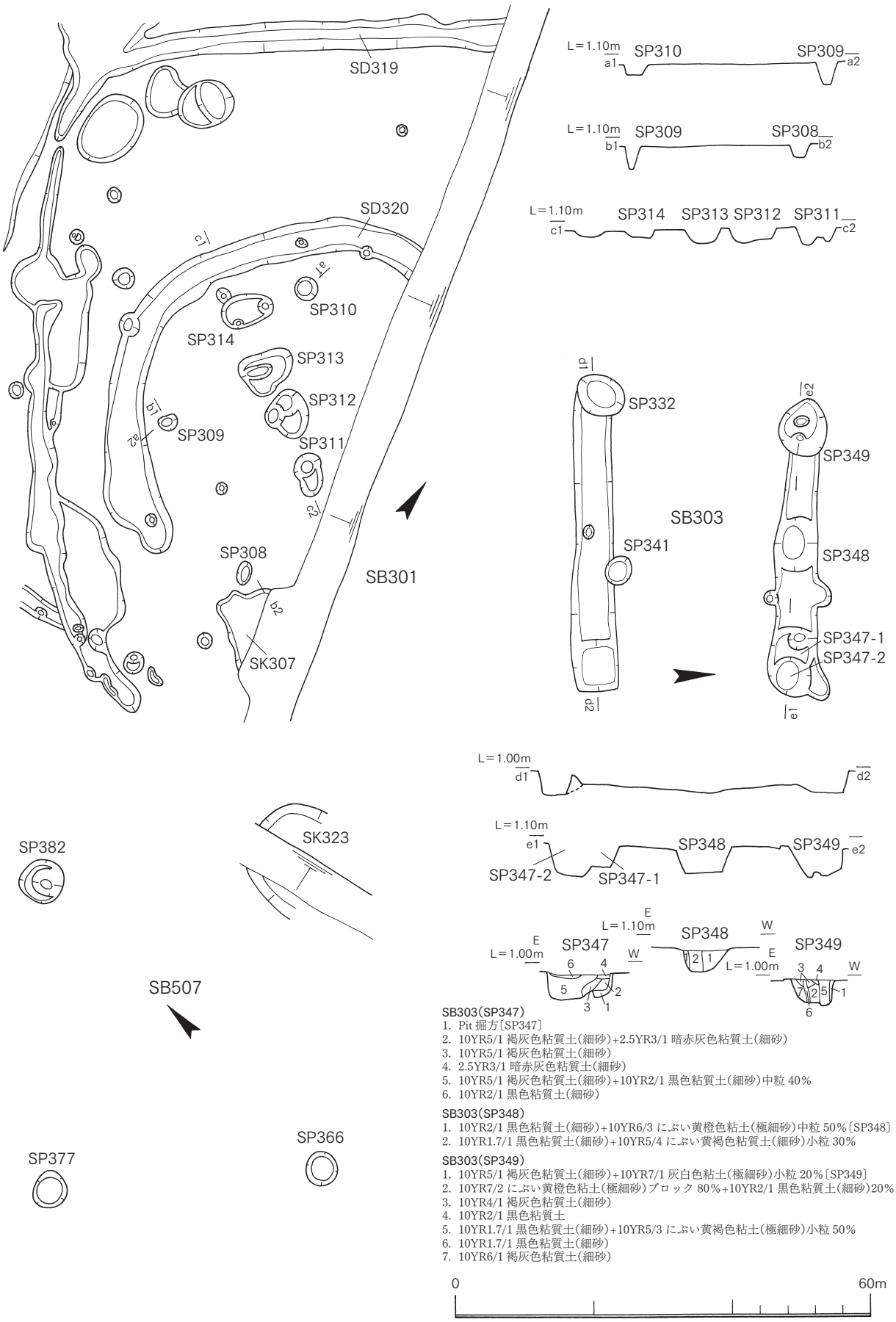
SD331(第8図)　S17・T17にて検出。SB505と切りあう。南に円弧を描く短い溝で幅0.7m、深さ0.2mを測る。SD327と併せ平地式建物の周溝の一部か。

包含層　口縁部を大きく外販させる古墳時代の甕(56)、古墳時代の大型の須恵器壺(57)、13世紀の龍泉窯系白磁碗(58)、袋文字「大」を記した須恵器坏身(59)などがある。

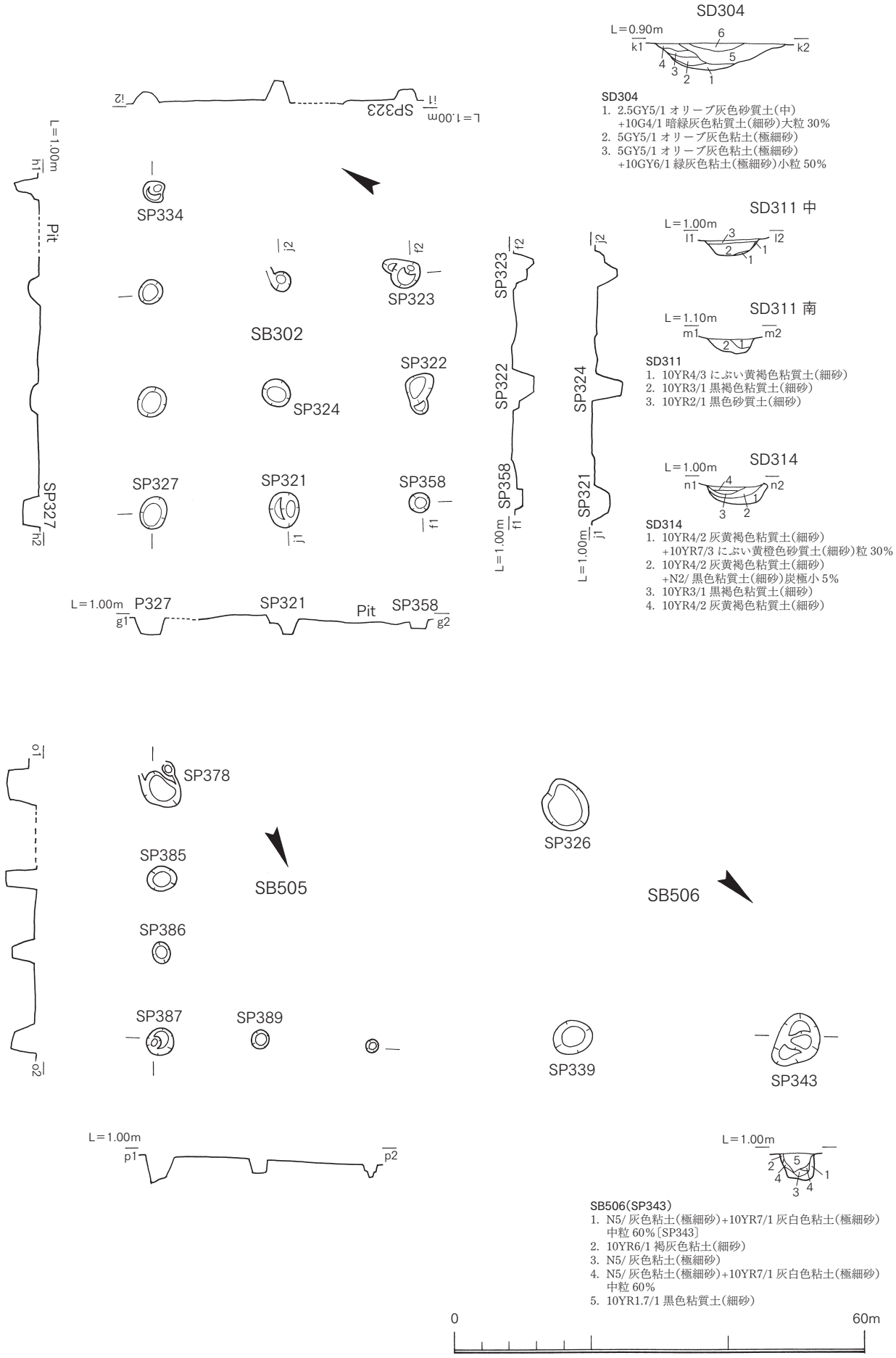


グリッド配置図〔S＝１/2,000〕

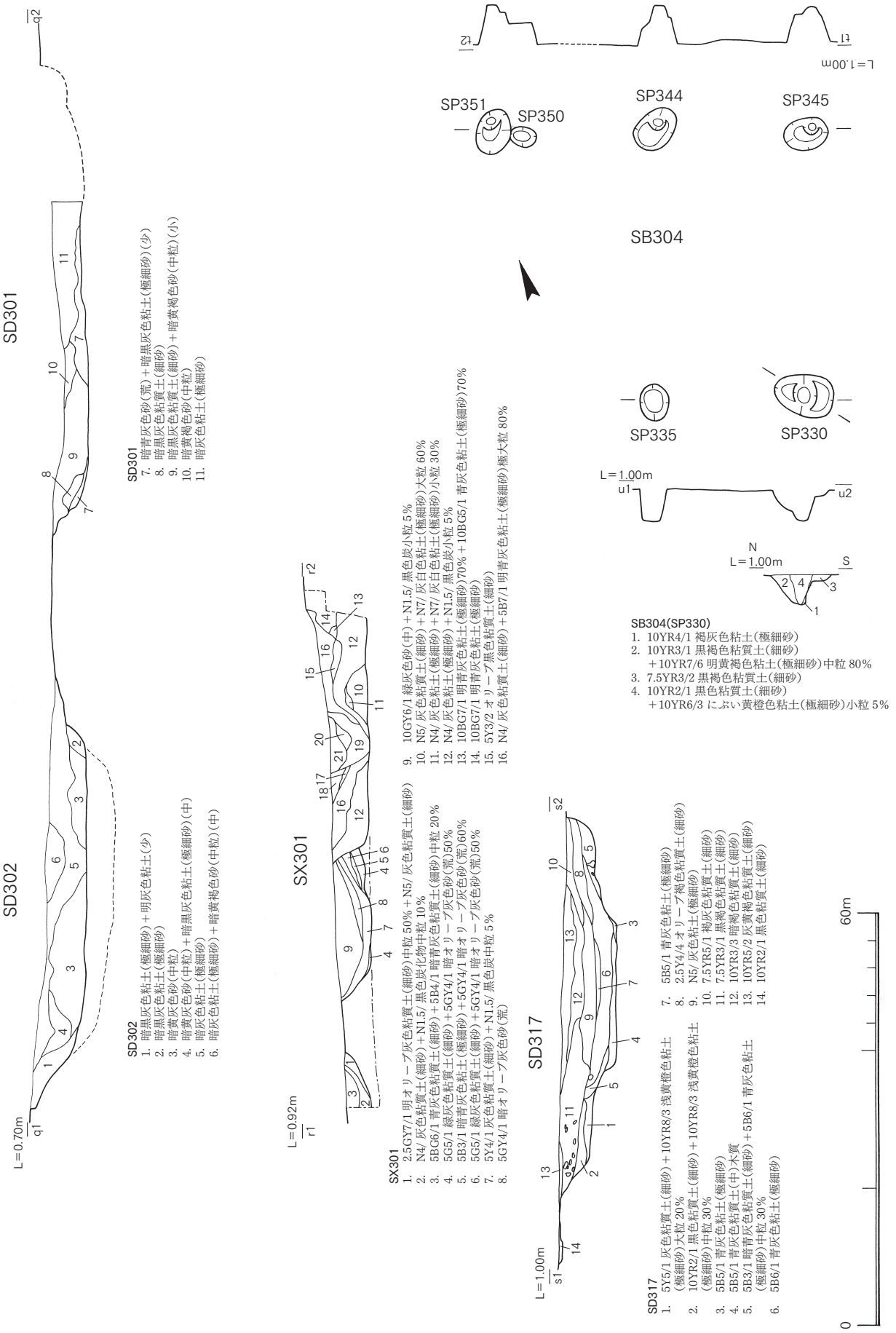
第４図　遺構全体図〔S＝１/250〕



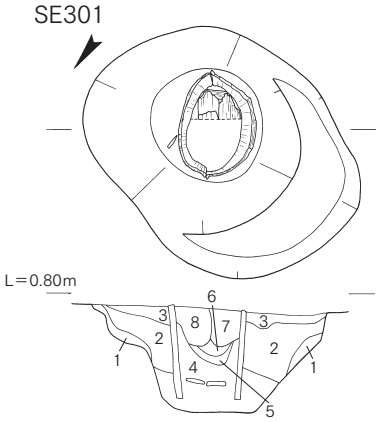
第 5 図　SB301・SD301・303・507遺構図〔S＝1/80〕



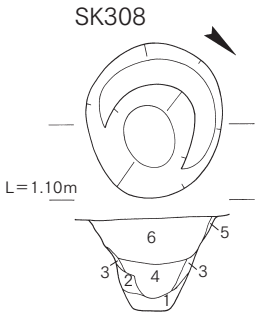
第 6 図　SB302・505・506遺構図〔S＝1/80〕



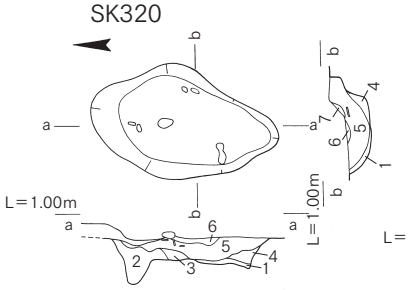
第７図　SB304・SD301・302・317・SX301遺構図〔S＝１/80〕



SE301
1. 2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土(極細砂)＋N5/ 灰色粘土(極細砂)中粒 20%
2. N4/ 灰色粘質土(細砂)＋2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土(極細砂)大粒 25%
3. 7.5YR8/3 浅黄橙色粘質土(細砂)＋7.5YR5/8 明褐色砂(荒砂)粒 10%
4. 5G4/1 暗緑灰色粘質土(細砂)＋5G1.7/1 緑黒色炭化物 20%
5. 10BG3/1 暗青灰色粘質土(細砂)＋5G1.7/1 緑黒色炭化物 50%
6. 10G4/1 暗緑灰色粘質土(細砂)＋5G1.7/1 緑黒色炭化物 10%
7. 10G4/1 暗緑灰色粘質土(細砂)＋5G1.7/1 緑黒色炭化物 30%
8. 5G5/1 緑灰色粘質土(細砂)

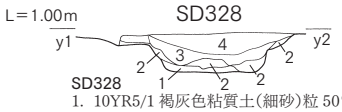


SK308
1. 2.5Y5/1 黄灰色粘土(極細砂)＋N3/ 暗灰色粘土(極細砂)板状 30%
2. N3/ 暗灰色粘土(極細砂)＋2.5GY7/1 明オリーブ灰色粘土(極細砂)中粒 20%
3. 2.5Y5/1 黄灰色粘質土(細砂)＋7.5Y2/1 黒色粘土(極細砂)10%
4. 7.5Y2/1 黒色粘土(極細砂)＋10Y6/1 灰色粘土(極細砂)中粒 20%
5. 7.5YR8/1 灰白色粘土(極細砂)＋7.5YR5/1 褐灰色粘土(極細砂)50%
6. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土(細砂)

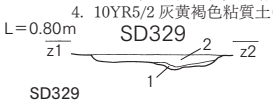


SK320(a)
1. 暗黒褐色粘質土(細砂)
　＋明黄白色粘質土(細砂)小粒 30%
2. 暗黒褐色粘質土(細砂)
　＋明黄白色粘質土(細砂)中粒 80%
3. 明灰色粘土(極細砂)
4. 暗黒褐色粘土(細砂)
5. 明黄白褐色粘質土(細砂)
　－地山ブロック
6. 明灰色粘質土(細砂)－カクラン

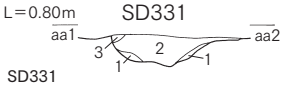
SK320(b)
1. 暗黒褐色粘質土(細砂)
　＋明黄白色粘質土(細砂)小粒 30%
2. 暗黒褐色粘土
3. 暗黒褐色粘土(細砂)
4. 明黄白褐色粘質土(細砂)
　－地山ブロック
5. 暗赤黄褐色粘質土(細砂)
　－焼土・地山の焼けたもの



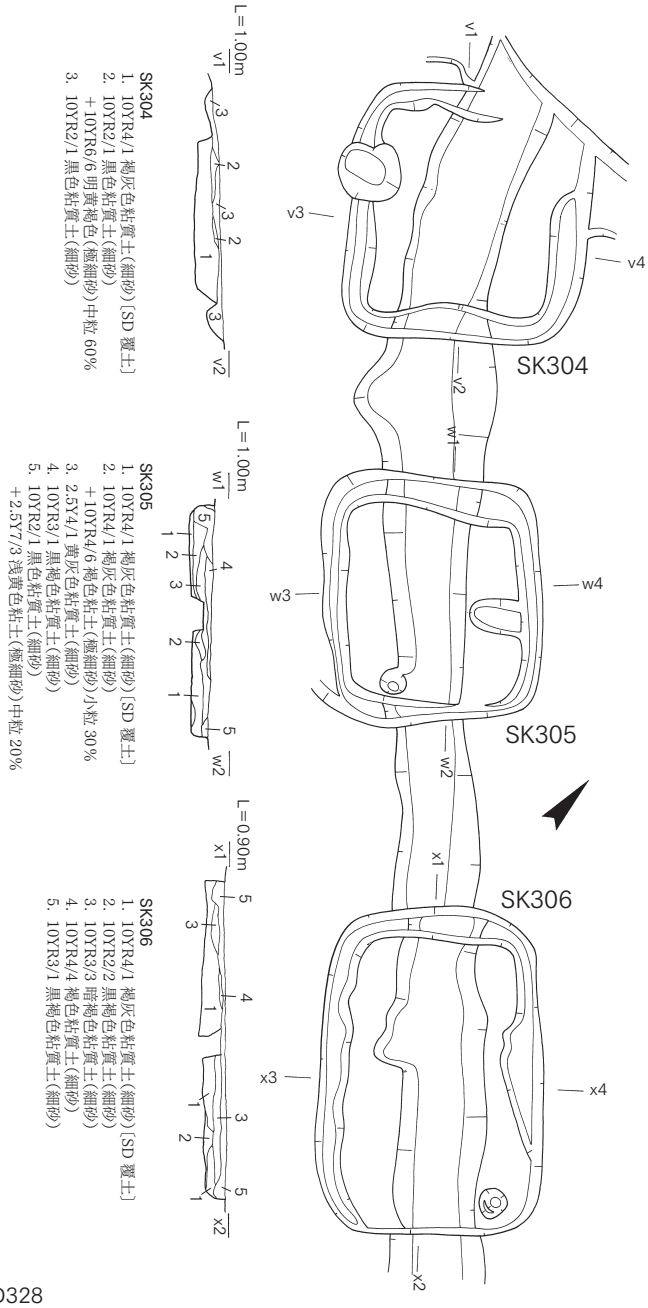
SD328
1. 10YR5/1 褐灰色粘質土(細砂)粒 50%
　＋10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土(細砂)粒 50%
2. 10YR5/1 褐灰色粘質土(細砂)
3. 10YR3/3 暗褐色粘質土(細砂)
4. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土(細砂)

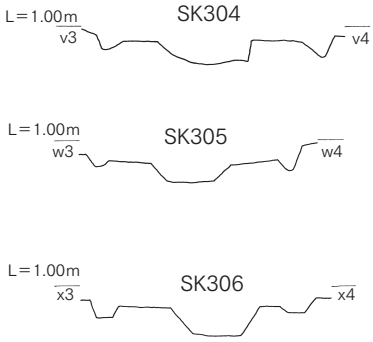


SD329
1. 10YR6/3 にぶい黄橙色粘質土(細砂)
2. 10YR3/2 黒褐色粘質土(細砂)

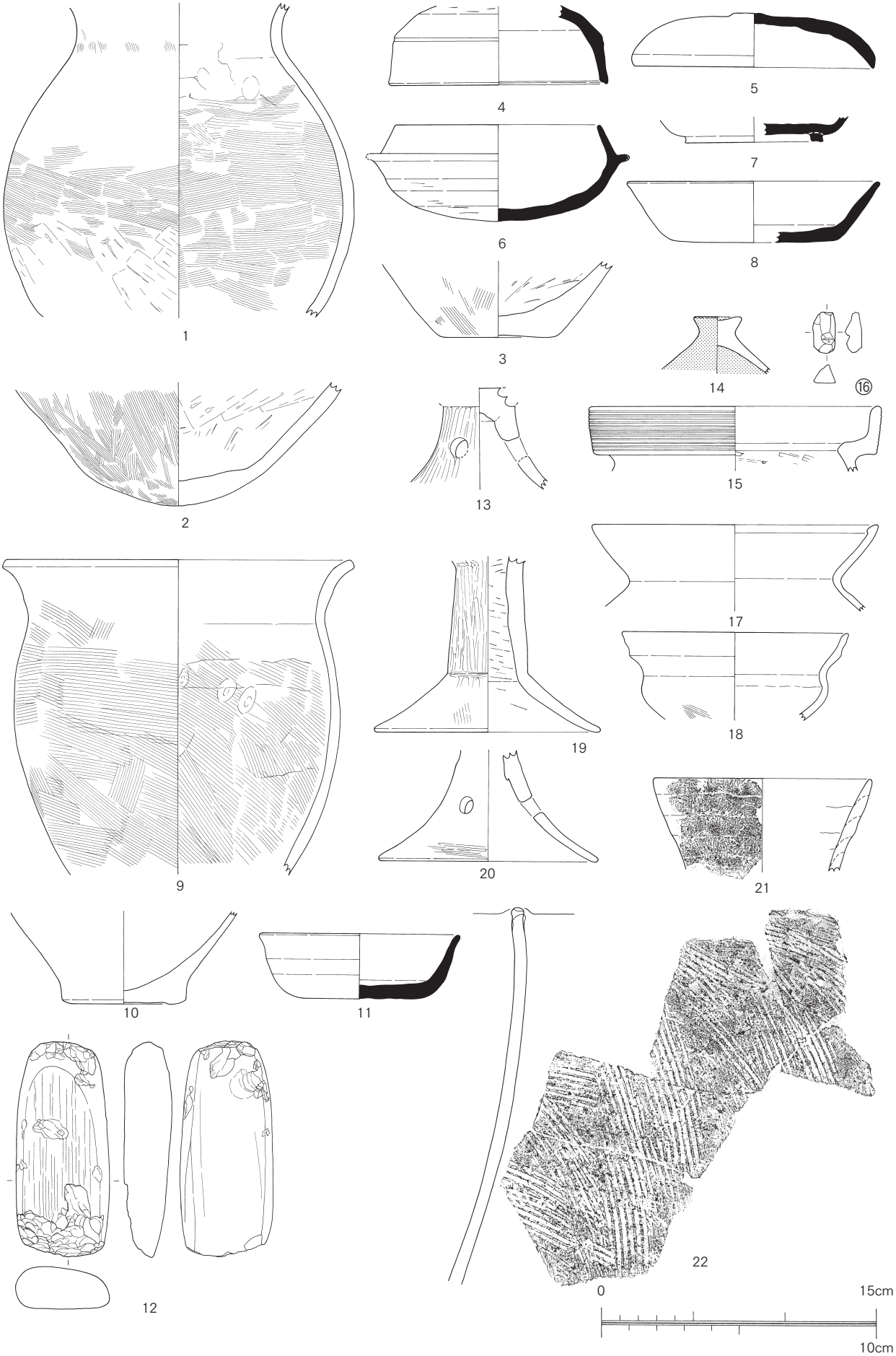


SD331
1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土(細砂)
　＋10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土(細砂)中粒 80%
2. 7.5YR1.7/1 黒色粘質土(細砂)
3. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土(細砂)

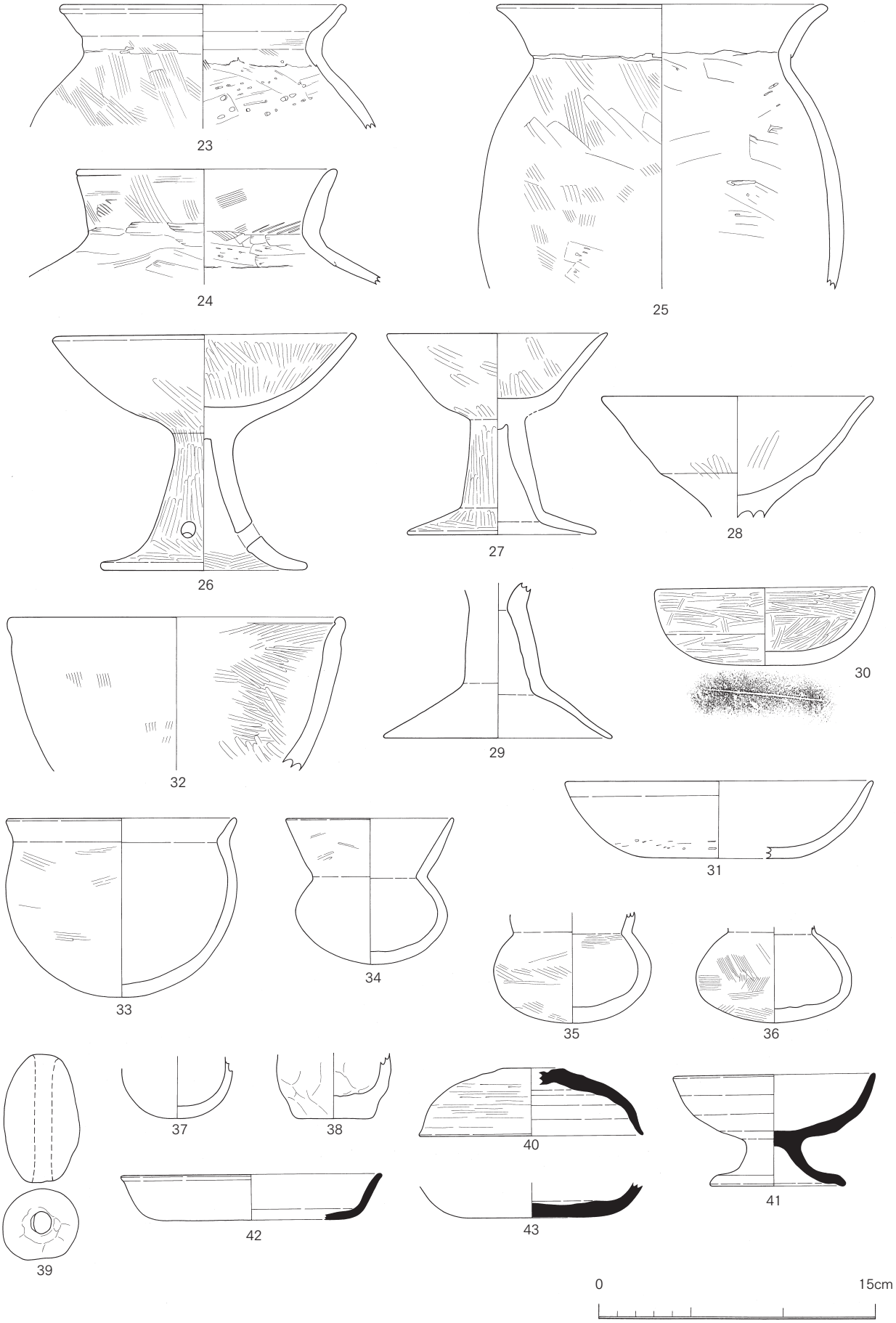




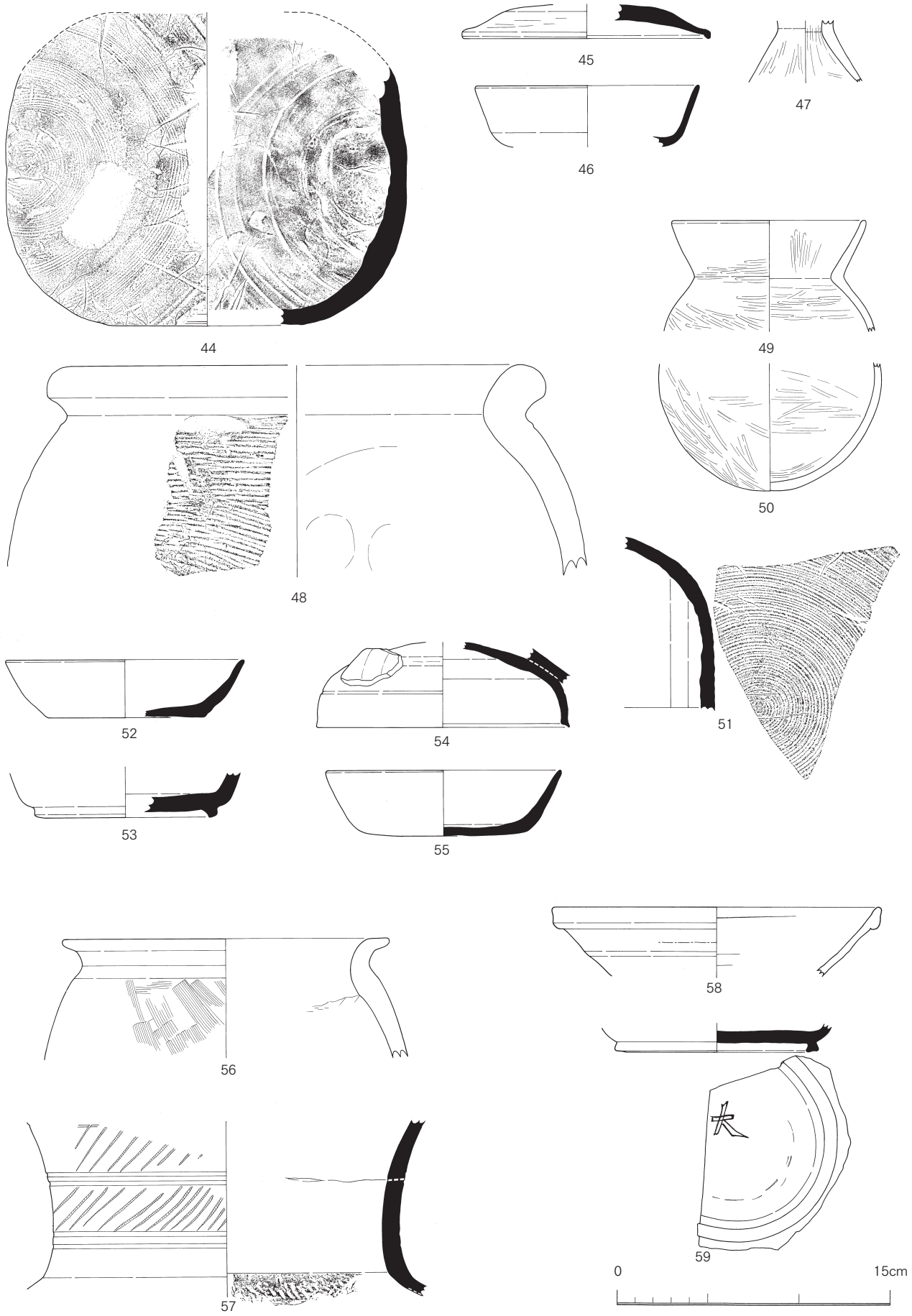
第 8 図　SE301・SK304・305・306・308・320・SD328・329・331遺構図〔S＝1/60〕



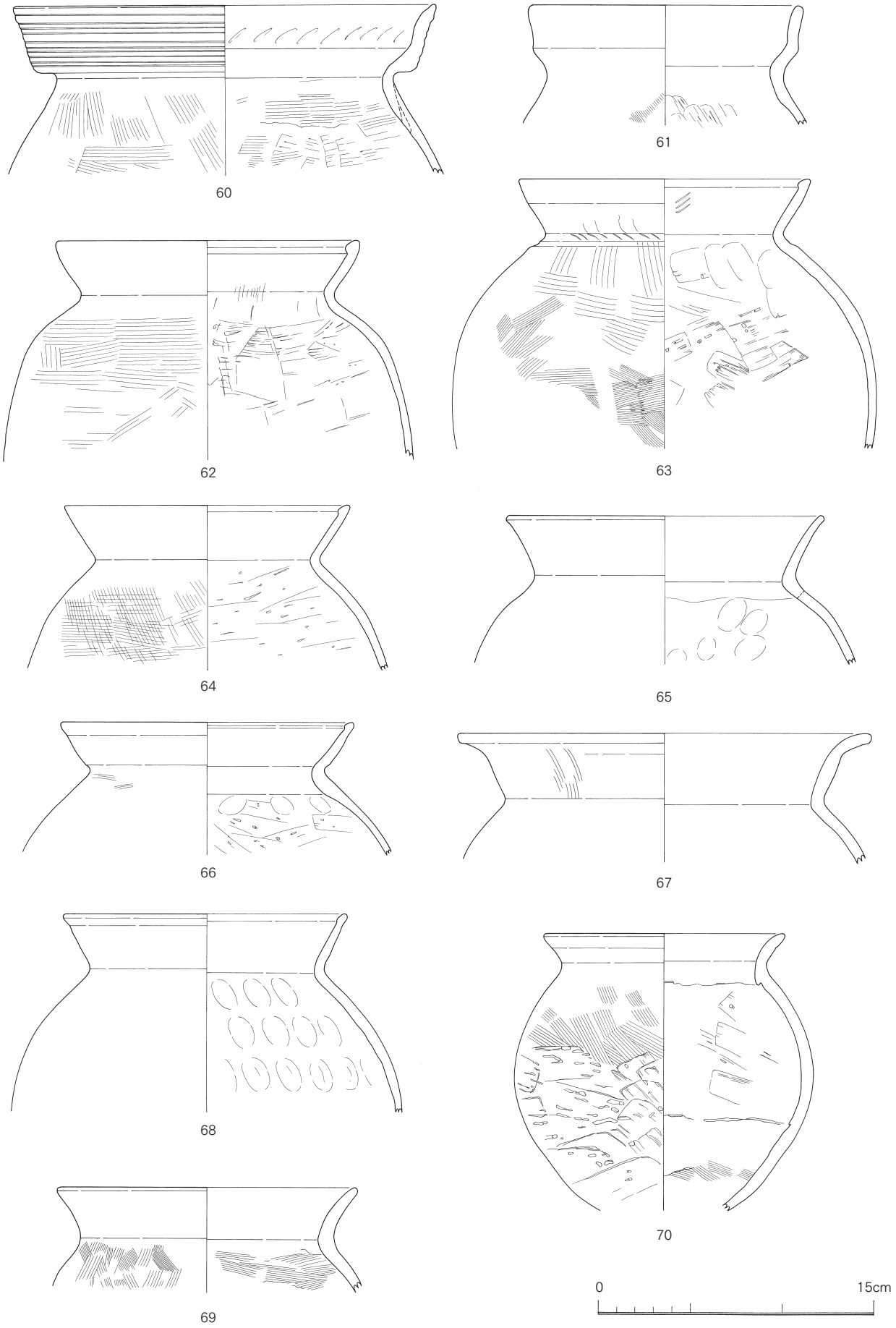
第９図　SK308・315・317・320・SE301・SX301　出土遺物〔S＝１/２・１/３丸数字〕



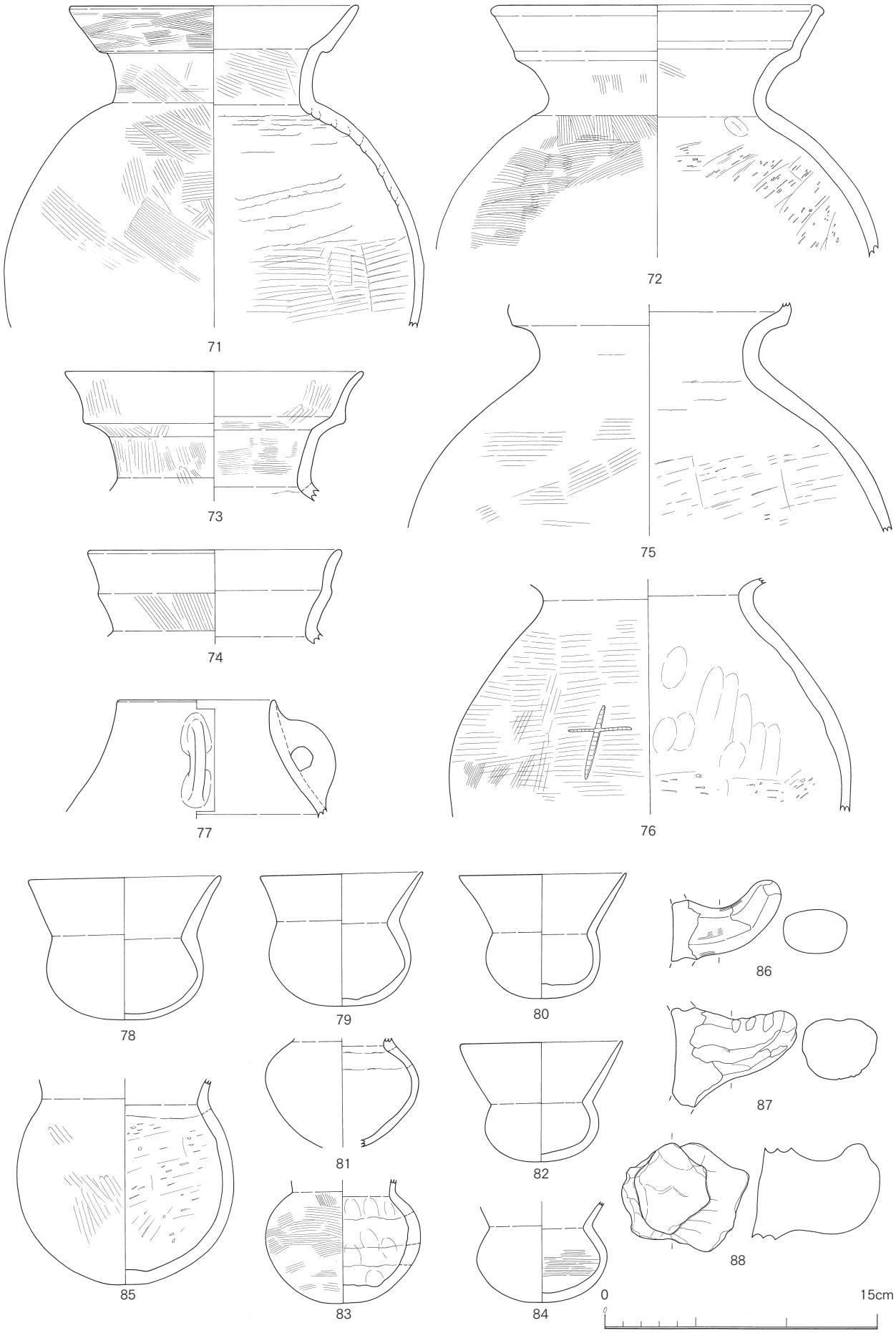
第10図　SD302　出土遺物〔S＝１/３〕



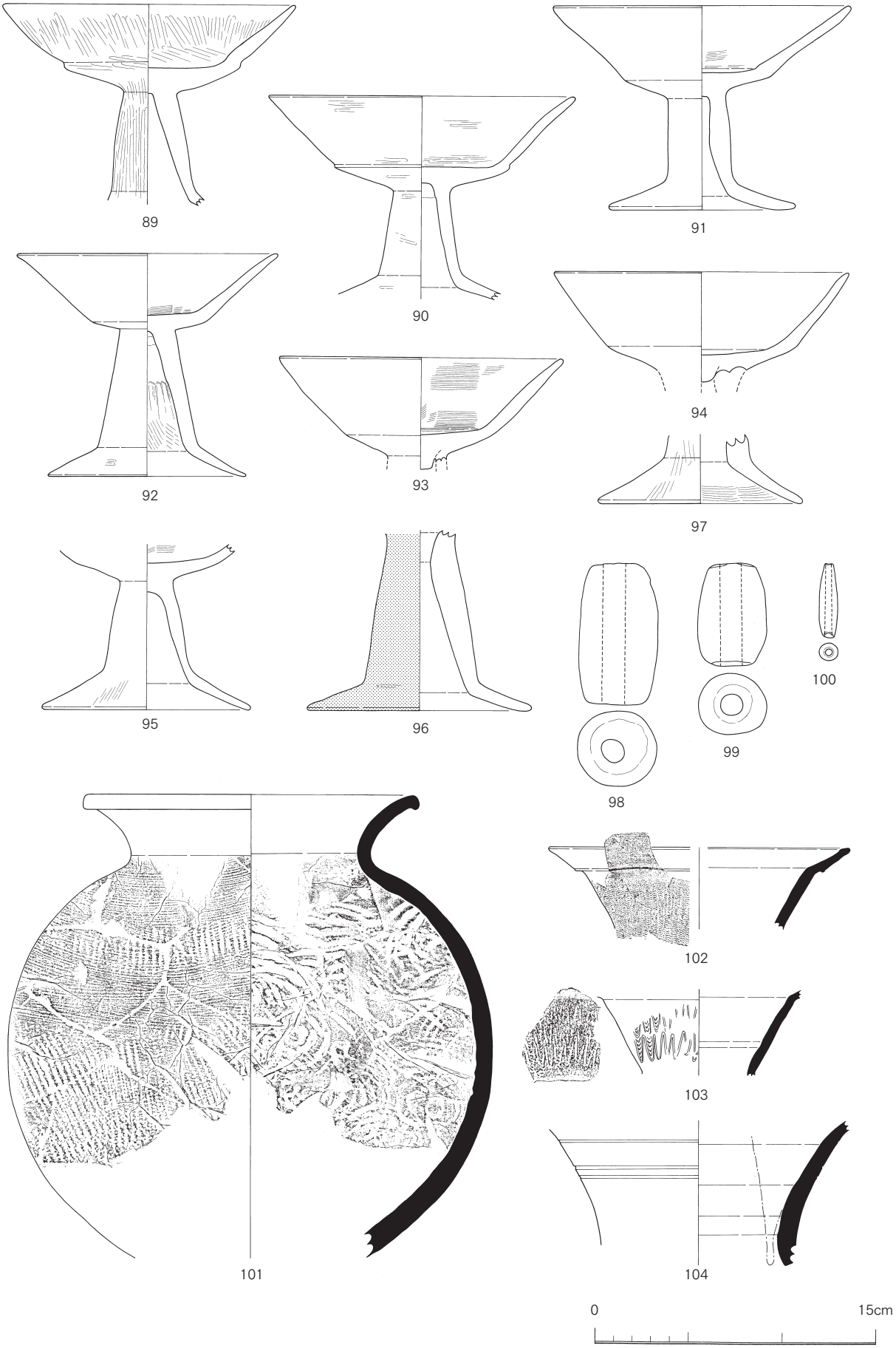
第11図　SD302・303・304・306・307・包含層　出土遺物〔S＝1／3〕



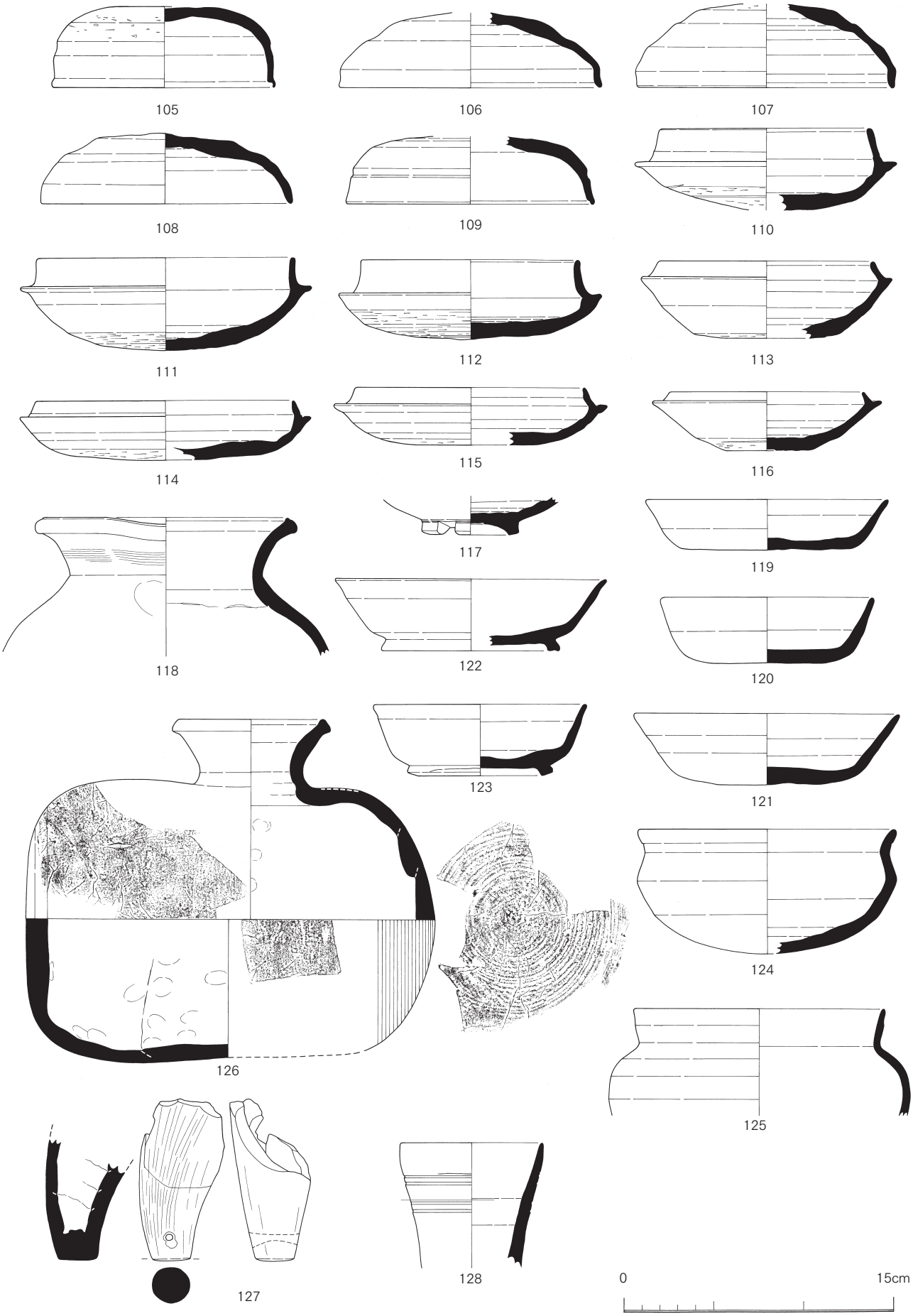
第12図　SD308　出土遺物〔S＝１/３〕



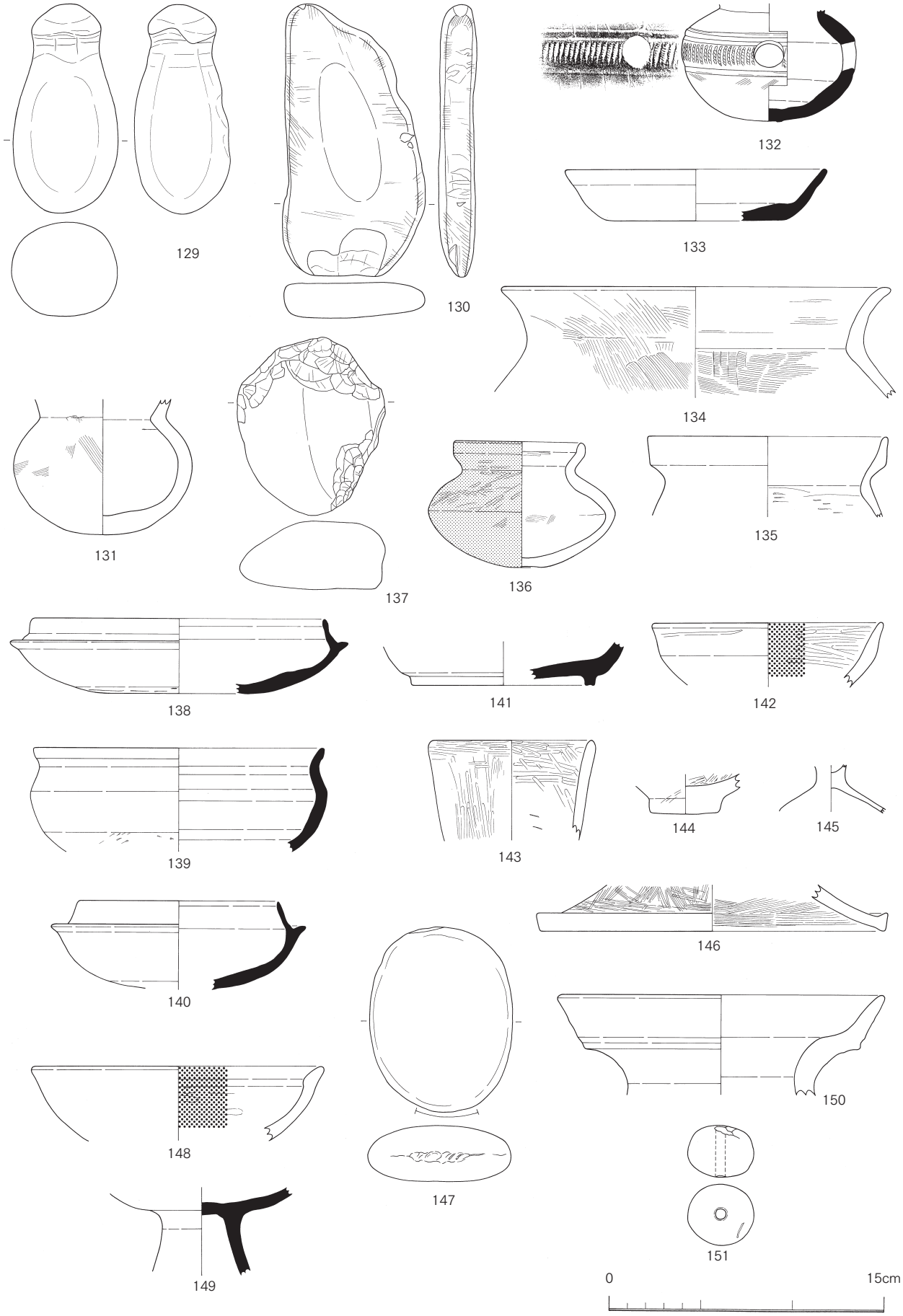
第13図　SD308　出土遺物〔S＝１/３〕



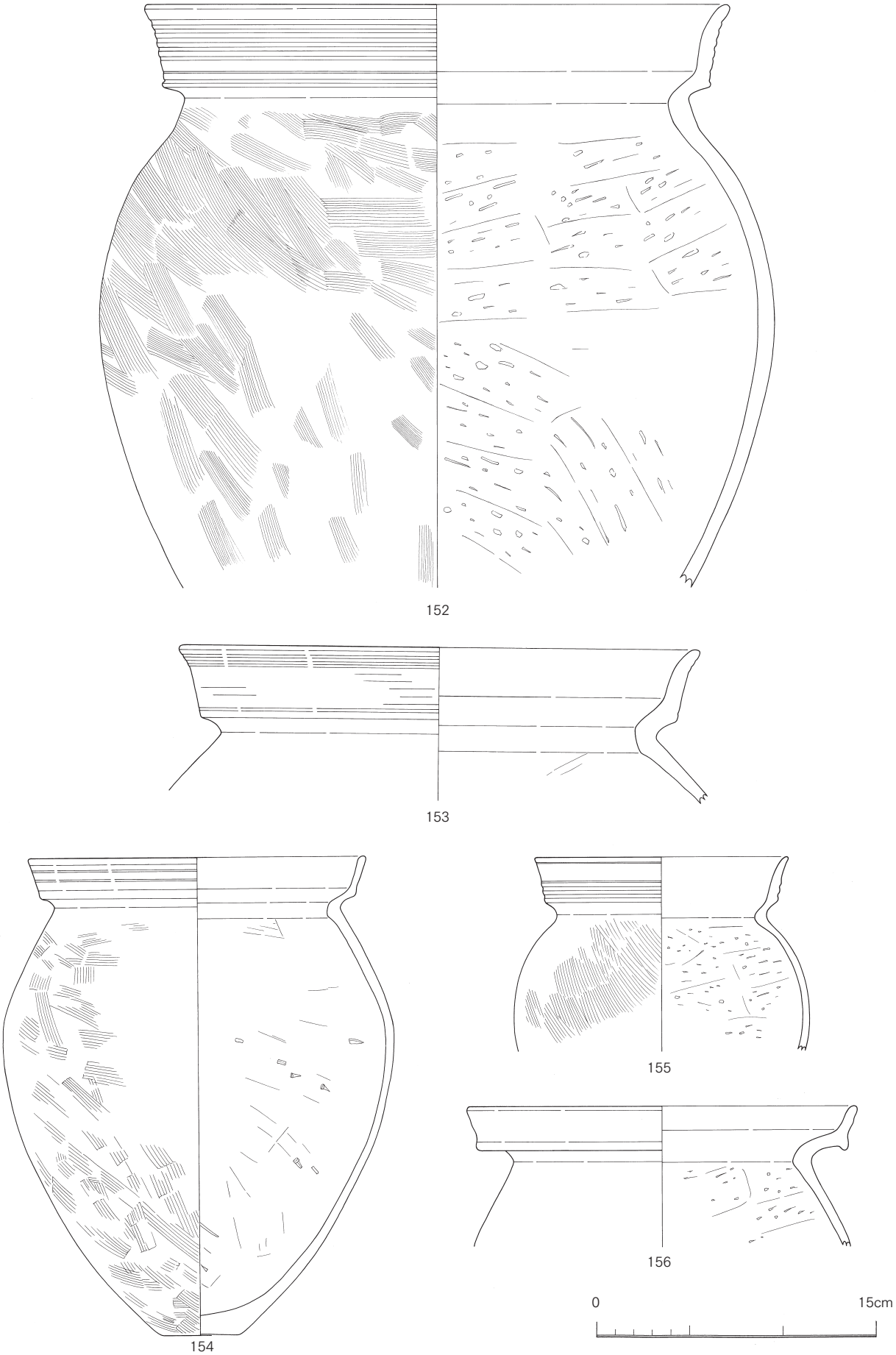
第14図　SD308　出土遺物〔S＝１/３〕



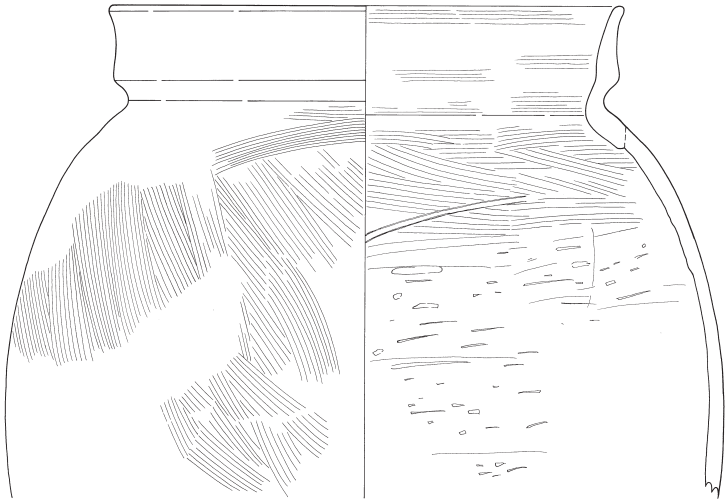
第15図　SD308　出土遺物〔S＝１/３〕



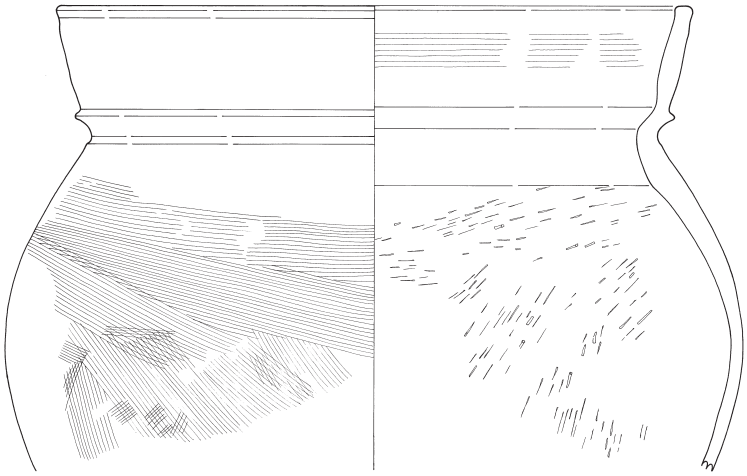
第16図　SD308・309・310・311・313・314・319・323・328・329　出土遺物〔S＝1／3〕



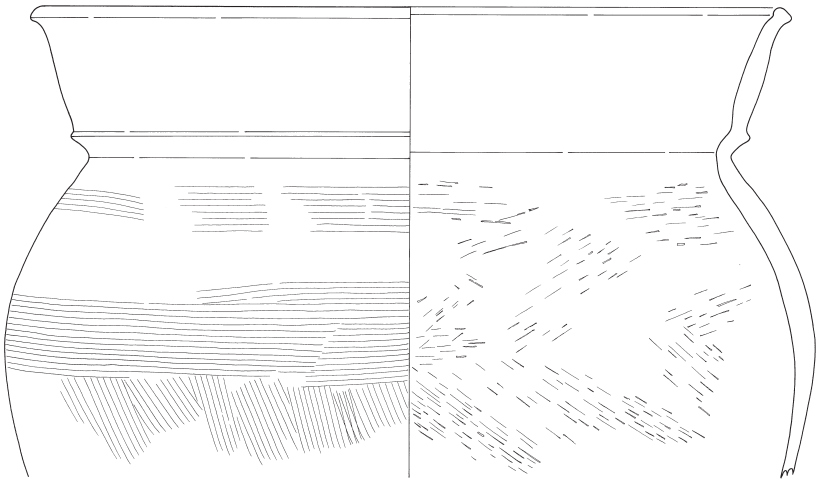
第17図　SD317　出土遺物〔S＝１/３〕



157



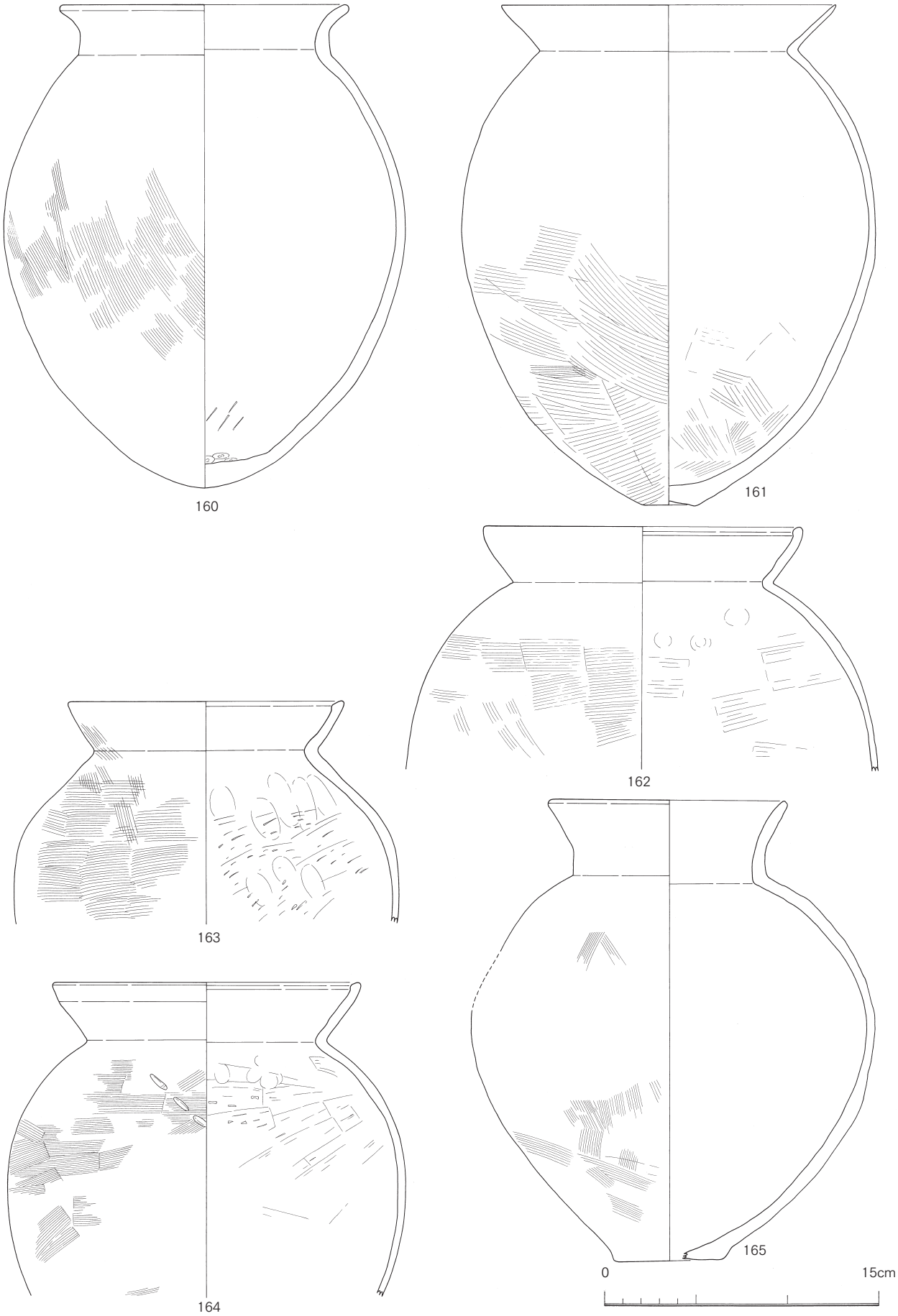
158



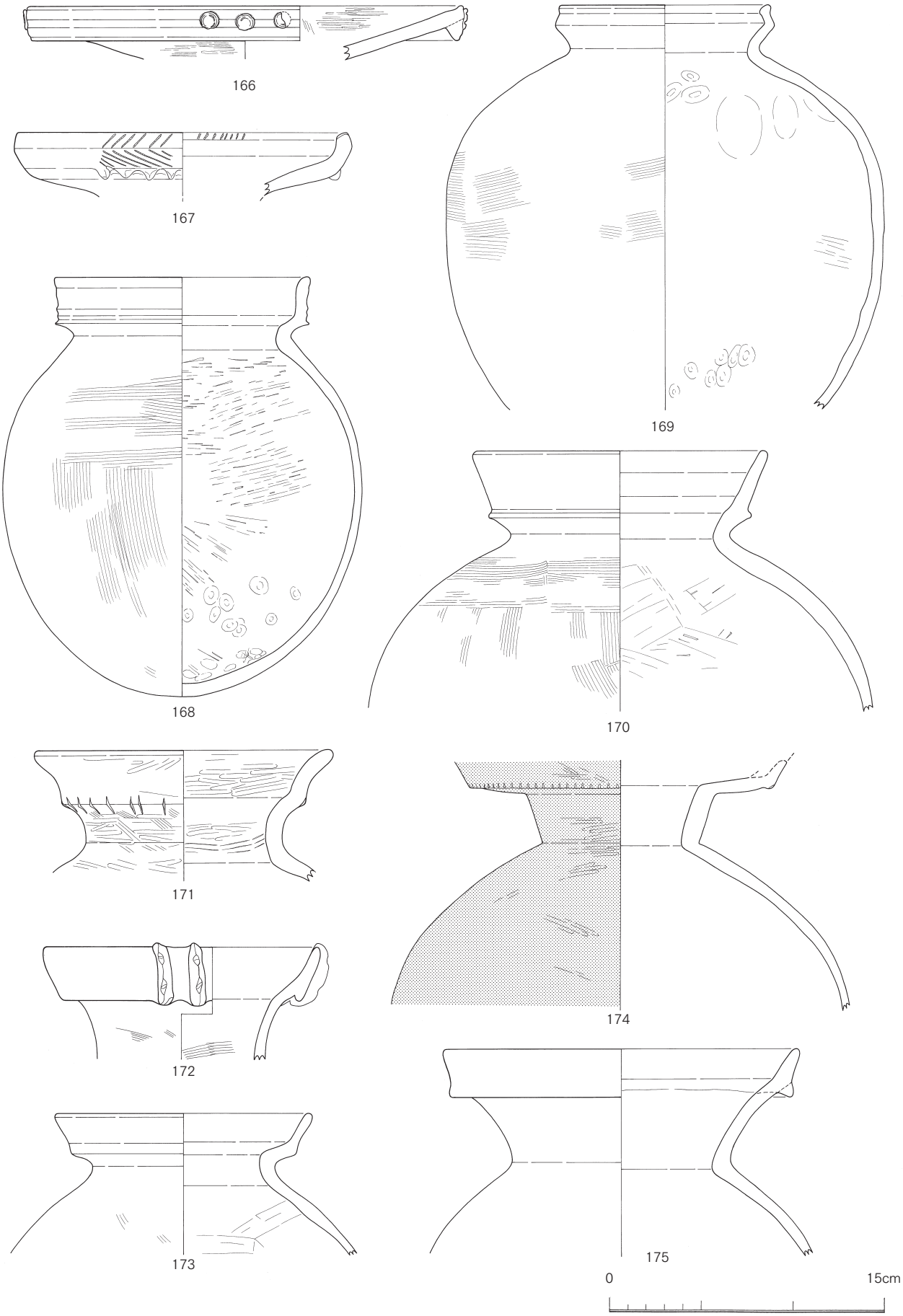
159

0　　15cm

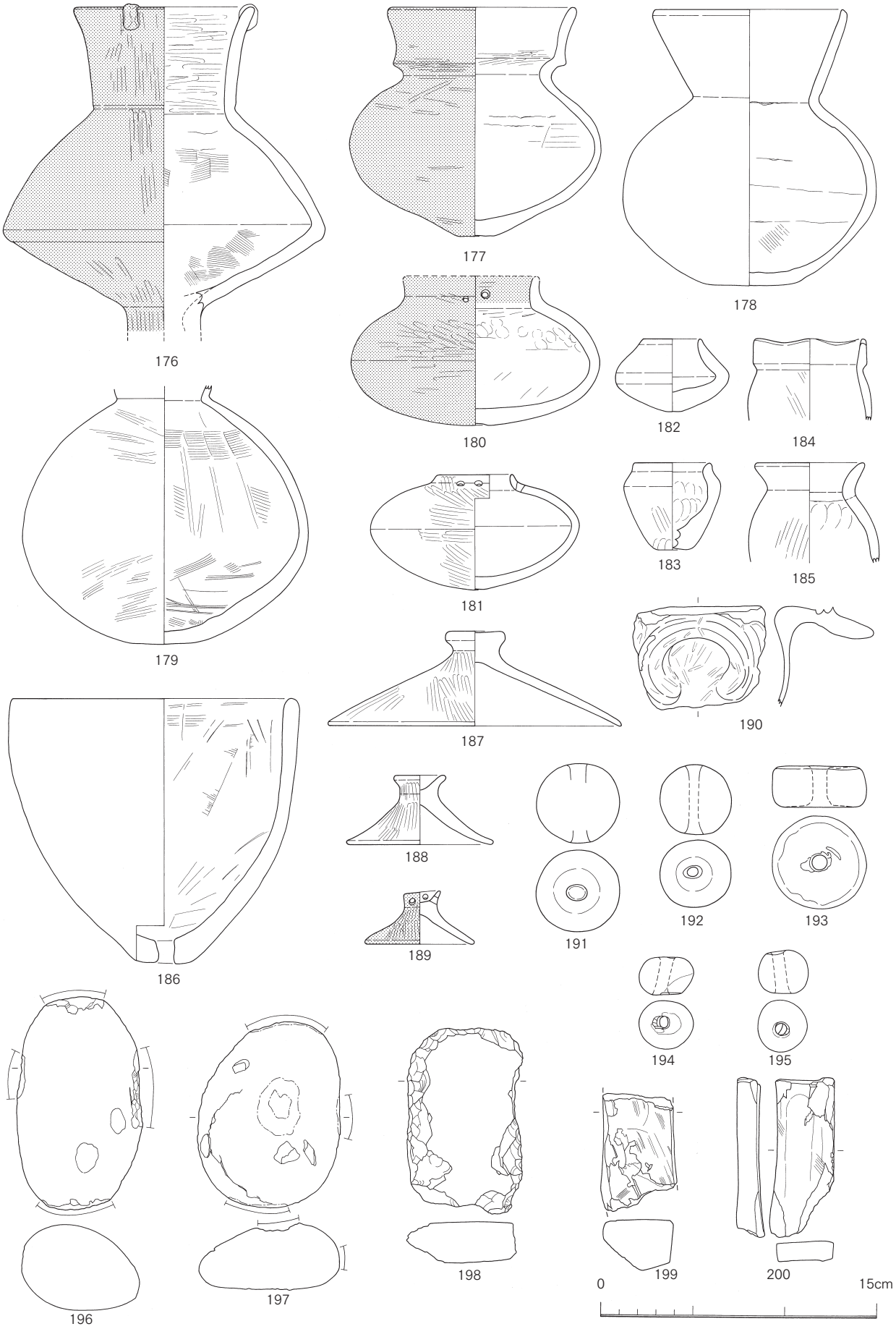
第18図　SD317　出土遺物〔S＝１/３〕



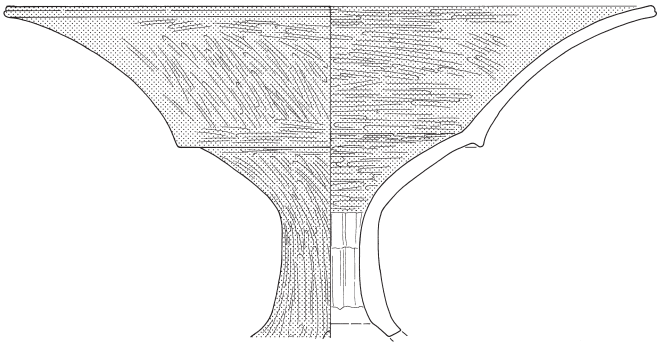
第19図　SD317　出土遺物〔S＝１/３〕



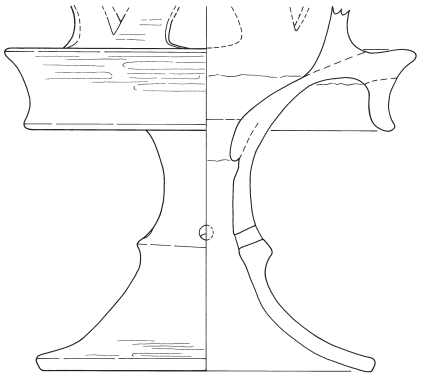
第20図　SD317　出土遺物〔S＝1／3〕



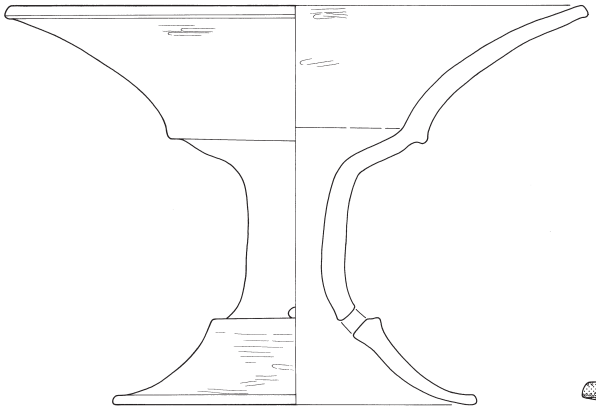
第21図　SD317　出土遺物〔S＝１/３〕



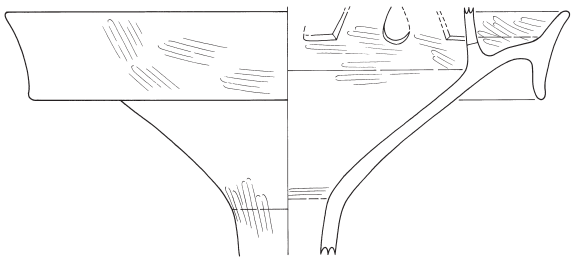
201



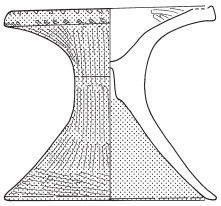
203



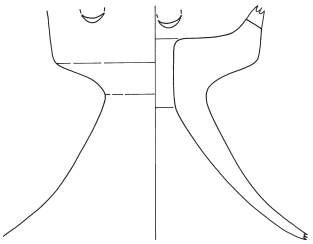
202



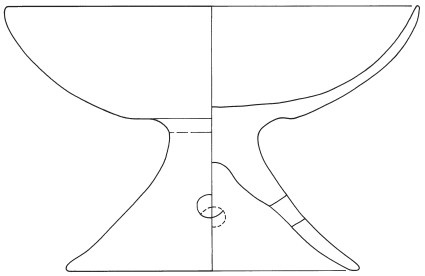
204



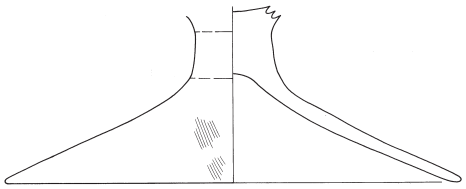
209



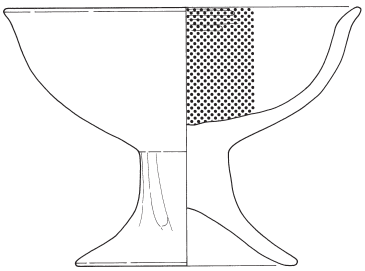
205



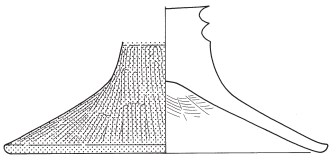
206



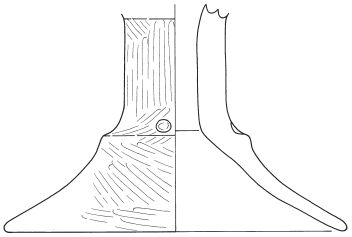
210



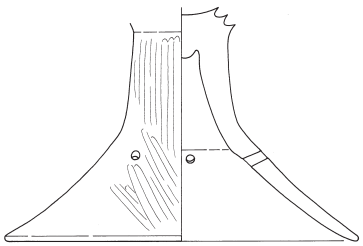
207



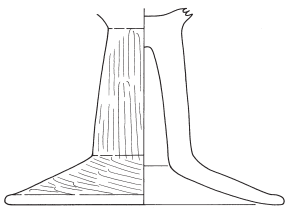
211



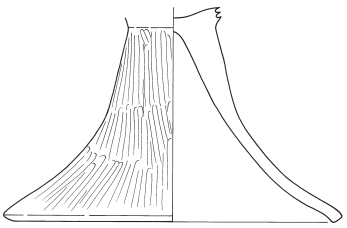
213



208



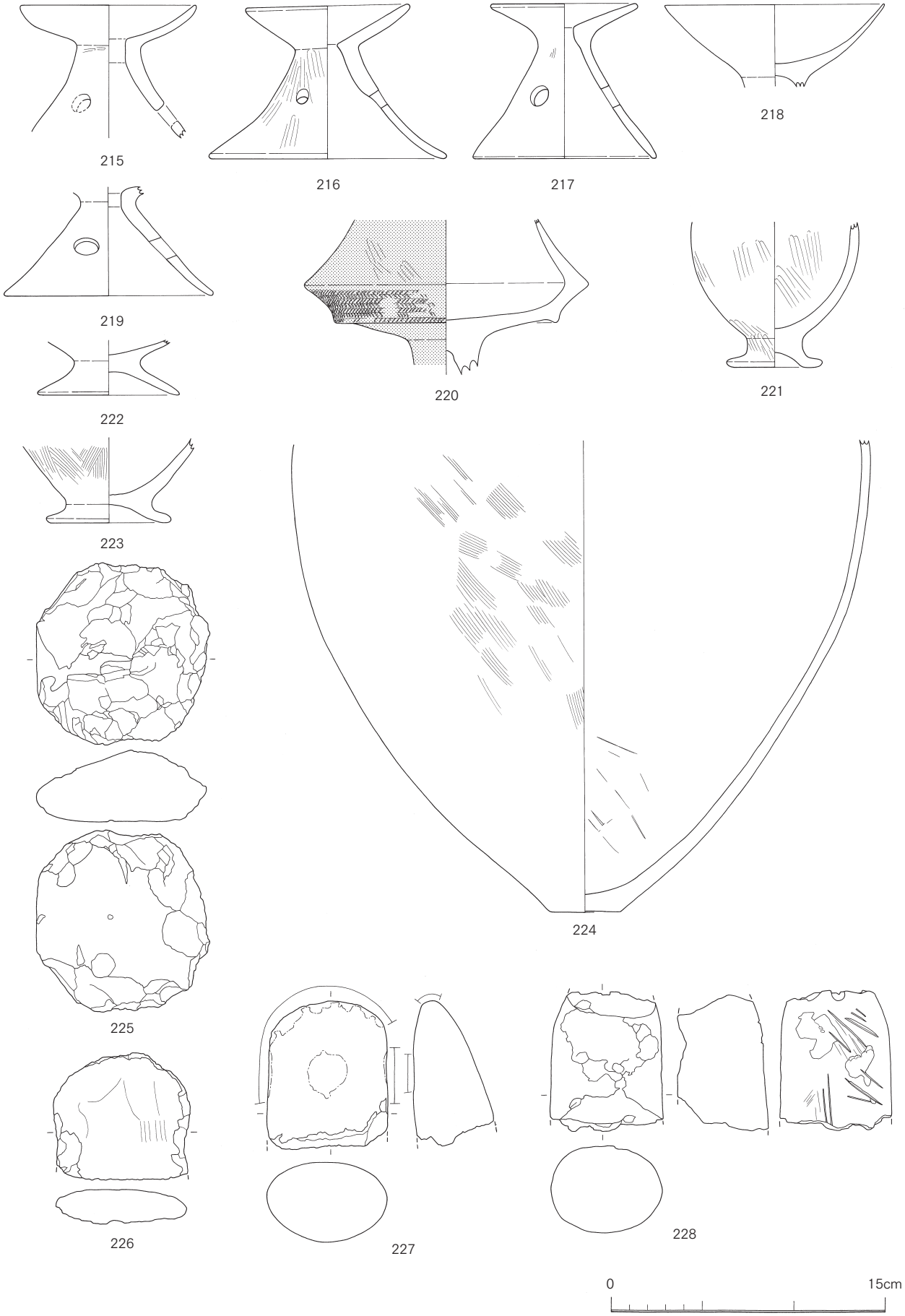
212



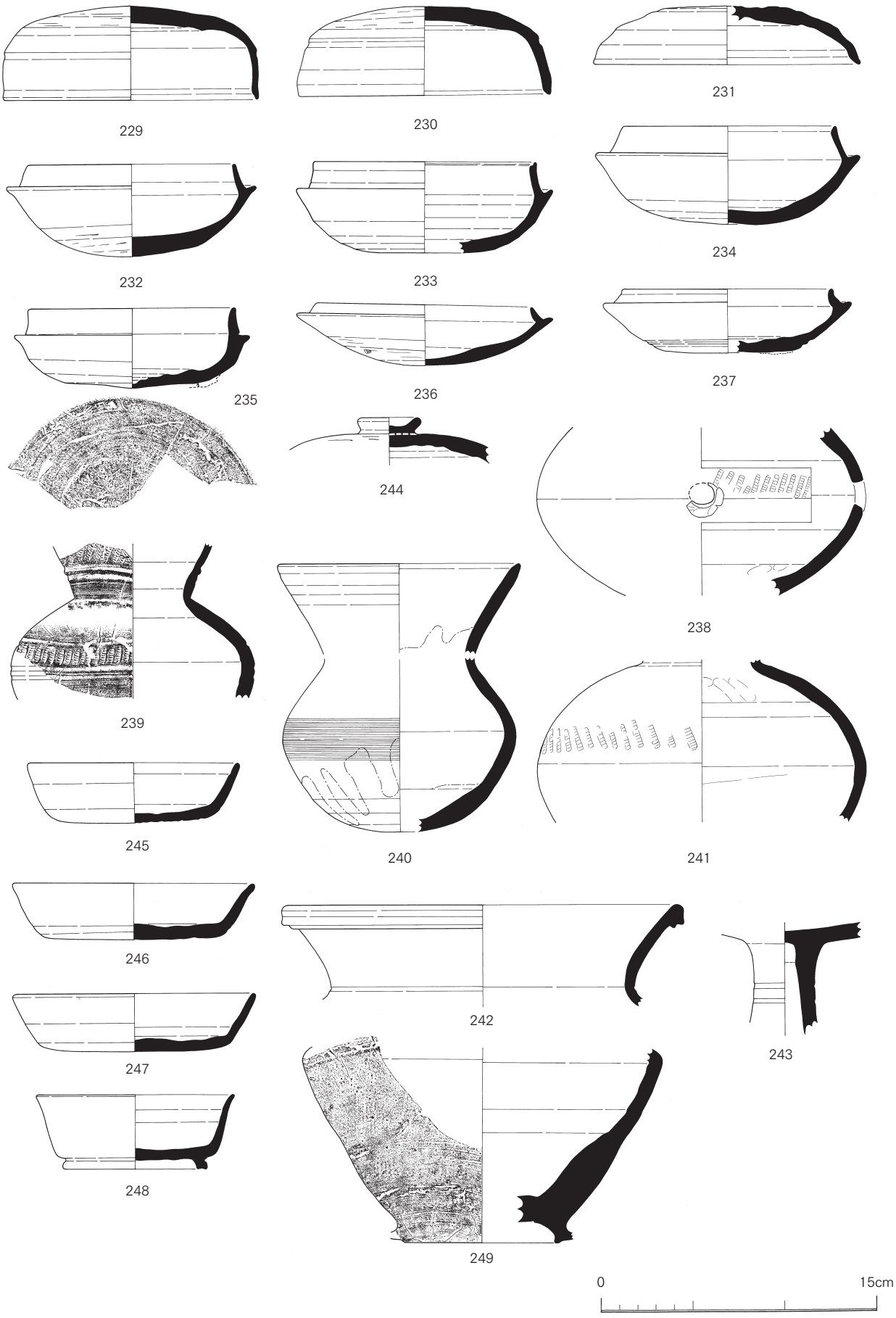
214

0 15cm

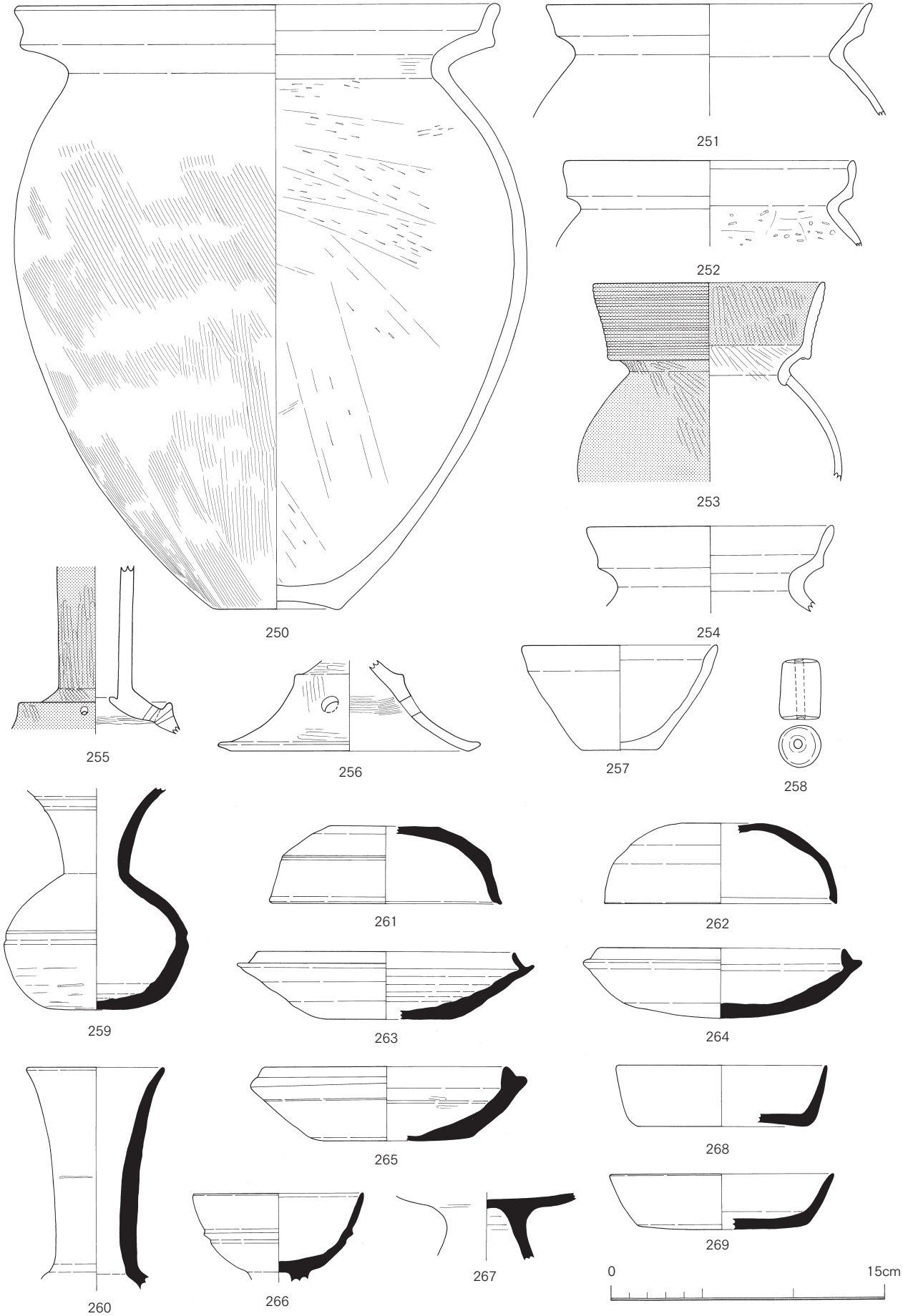
第22図　SD317　出土遺物〔S＝１/３〕



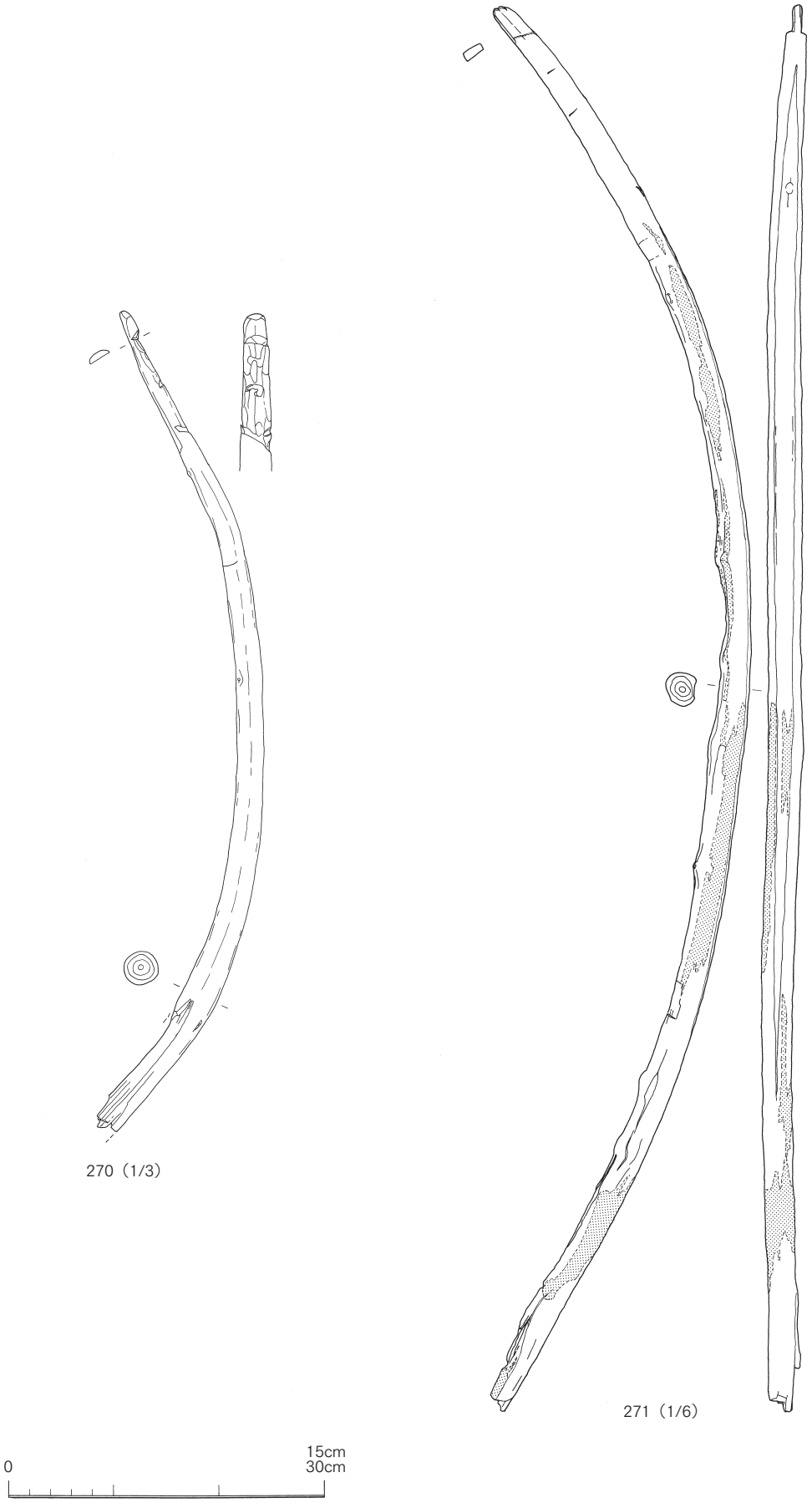
第23図　SD317　出土遺物〔S＝1／3〕



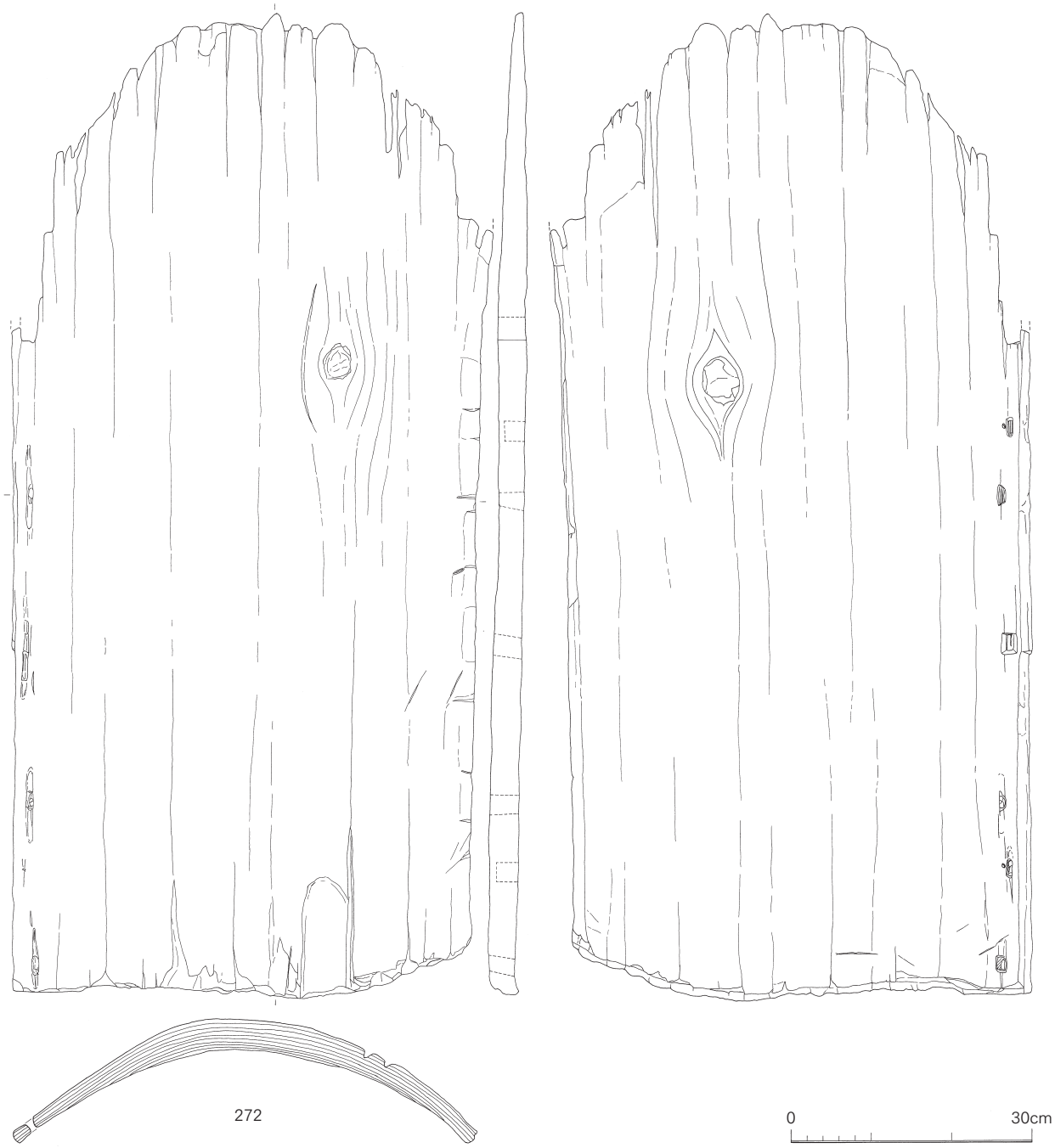
第24図　SD317　出土遺物〔S＝１/３〕



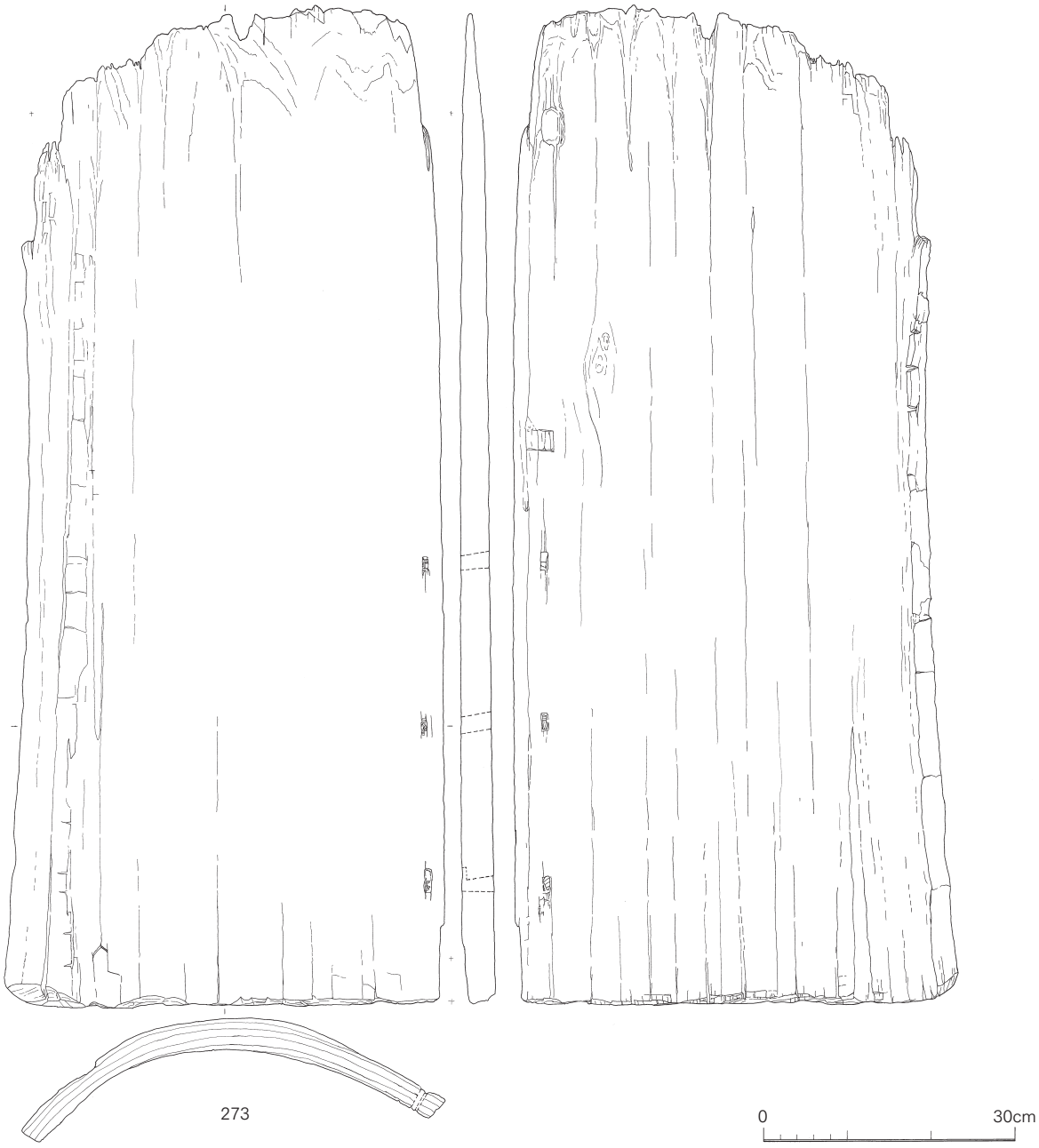
第25図　SD318・322　出土遺物〔S＝１/３〕



第26図　SD317　出土遺物〔S＝1/3・S＝1/6〕



第27図　SE206　出土遺物〔S＝１/６〕



第28図　SE206　出土遺物〔S＝１/６〕

第２表　土器・陶磁器観察表

図版	番号	調査区	遺構	器種	法量(mm)					遺存度	胎土				調整				色調		備考	実測番号
					口径	器高	胴径	底径	頸径		砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	外面	内面		
9	1	西工区	SE301	土師器壺		(174)	193		112	胴4	○		△			ハケ・ケズリ		ハケ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	胴部外面煤付着	F008
	2	西工区	SE301	土師器壺		(68)		16		底12	○					ハケ		ケズリ	10YR4/1 褐灰色	10YR6/2 灰黄褐色	破断面炭化物付着・粒状炭化物(米?)付着	F002
	3	西工区	SE301	土師器壺		(64)		62		底12	○	△	◎	△		ハケ		ケズリ	10YR8/1 灰白色	7.5YR8/3 浅黄橙色	底部外面黒斑	F001
	4	西工区	SE301	須恵器坏蓋	119	(44)				2	○				ロクロナデ		ロクロナデ		N8/ 灰白色	N8/ 灰白色		F007
	5	西工区	SE301	須恵器坏蓋	132	30		64		4	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	N8/ 灰白色	外面降灰・溶着痕	F006
	6	西工区	SE301	須恵器坏身	112	53		75		1	○		○		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色		F005
	7	西工区	SE301	須恵器坏身		(19)		76		底5	○		◎			ロクロナデ・ヘラ削り		ロクロナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	高松産	F004
	8	西工区	SE301	須恵器坏身	139	34		90		5	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	南加賀産	F003
	9	西工区	SK308	土師器甕	188	(174)	178		162	4	△		△	△	ハケ・ナデ	ハケ	ハケ・ナデ	ハケ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	内面接合痕・指頭圧痕残	T014
	10	西工区	SK308	土師器壺		(51)		60		底4	○			○					10YR8/3 浅黄橙色	10YR7/1 灰白色		T012
	11	西工区	SK308	須恵器坏身	108	36		72		3	△		○		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/1 灰白色	5Y6/1 灰色	高松産	T011
	13	西工区	SK315	土師器高坏		(56)			39	脚12	○	○				ミガキ		ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	透かし穴3個残	T010
	14	西工区	SK317	土師器蓋		(31)			摘26	摘12				△					10R4/6 赤色	10R4/6 赤色	内外面赤彩	T009
	15	西工区	SK317	土師器甕	156	(36)			132	1	○		○		ナデ		ナデ	ヘラ削り	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	擬凹線12条・頸部煤付着	T008
	17	西工区	SK320	土師器甕	156	(48)			116	1	○				ナデ		ナデ		10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色		T002
	18	西工区	SK320	土師器鉢	124	(48)	102		100	1	○							ハケ	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色		T001
	19	西工区	SK320	土師器脚部		(92)		120		裾5	○			△		ミガキ		ケズリ・ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色		T003
	20	西工区	SK320	土師器器台		(61)		118		裾4	△							ミガキ	5YR7/6 橙色	7.5YR6/6 橙色	透かし穴1個残	T004
	21	西工区	SX301	土師器壺	118	(51)				2	△				ナデ		ナデ		2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y8/2 灰白色	外面輪積痕	M001
	22	西工区	SX301	土器深鉢		(208)				1	△		◎		条痕文	条痕文	ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	１０YR6/3 にぶい黄橙色	晩期下野式	M002
10	23	西工区	SD302	土師器甕	152	(68)			130	1	△		◎		ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	7.5YR8/4 浅黄橙色	2.5YR5/4 にぶい赤褐色		Q003
	24	西工区	SD302	土師器壺	139	(63)			126	6	△		△		ハケ・ナデ	ケズリ	ハケ・ナデ	ケズリ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/6 黄橙色		Q002
	25	西工区	SD302	土師器甕	175	(155)	199		140	3	◎		○		ナデ	ハケ・ケズリ	ナデ	ケズリ	10YR3/3 にぶい黄橙色	N3/ 暗灰色		Q004
	26	西工区	SD302	土師器高坏	166	130		112	32	9	○			△	ミガキ	ミガキ	ミガキ・ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/2 灰白色	口縁黒斑　透かし穴3	N002
	27	西工区	SD302	土師器高坏	120	110		108	30	裾5	○		△	○	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙色	7.5YR7/3 にぶい橙色		N005
	28	西工区	SD302	土師器高坏	148	(66)					◎		○	◎	ミガキ・ナデ		ミガキ・ナデ		7.5YR7/6 橙色	5YR7/6 橙色		N003
	29	西工区	SD302	土師器器台		(89)		124	31	裾5	○		○						10YR8/3 浅黄橙色	7.5YR6/3 にぶい褐色		N004
	30	西工区	SD302	土師器椀	116	43		48		9	◎				ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR6/3 にぶい褐色	底部ヘラ記号	E018
	31	西工区	SD302	土師器椀	168	43		82		5	○		△	△	ナデ	ケズリ	ナデ	ナデ	5YR6/4 にぶい橙色	10YR8/3 浅黄橙色	内外面赤彩	N001
	32	西工区	SD302	土師器鉢	179	(84)				4	○				ハケ・ナデ	ハケ	ハケ・ミガキ	ミガキ	10YR8/3 浅黄橙色	5YR7/3 にぶい橙色		Q001
	33	西工区	SD302	土師器甕	124	98	126	14	118	3	○		△		ナデ	ナデ・ハケ	ナデ	ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	7.5YR5/4 にぶい橙色	外面煤付着	E028
	34	西工区	SD302	土師器壺	91	80	83	11	62	2	○	△		△	ミガキ・ナデ	ナデ	ミガキ・ナデ	ナデ	5Y7/4 にぶい橙色	7.5Y7/3 にぶい橙色		E023
	35	西工区	SD302	土師器壺		(60)	86	13	64	胴12	◎		△	△		ハケ・ナデ		ハケ・ナデ	2.5Y6/6 明黄褐色	2.5Y6/6 明黄褐色		E027
	36	西工区	SD302	土師器壺		(52)	85	11	48	胴12	○	○	△	△		ハケ		ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR7/3 にぶい黄橙色		E024
	37	西工区	SD302	土師器壺		(34)		10		底12	◎		△	△		ナデ		ナデ	10YR7/2 にぶい黄橙色	7.5Y6/4 にぶい橙色		E026
	38	西工区	SD302	土師器手捏土器		(36)		40		底7	○			○		ナデ		ナデ	2.5Y7/4 浅黄色	2.5Y7/3 浅黄色	内面指頭圧痕	E025
	39	西工区	SD302	土師器土錘	70	41	39			11	○	○	△	△	ナデ					10YR8/2 灰白色	穴径11㎜	E020
	40	西工区	SD302	須恵器坏蓋	122	37		35		4	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色		E021
	41	西工区	SD302	須恵器高坏	110	62		74	29	11	◎				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y5/1 黄灰色	末産	E019
	42	西工区	SD302	須恵器坏身	142	25		110		5	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR6/6 明黄褐色	10YR6/6 明黄褐色		E015
	43	西工区	SD302	須恵器坏身		(19)		70		底8	○					ロクロナデ・ヘラ削り		ロクロナデ	10YR5/2 灰黄褐色	2.5Y7/2 灰黄色	内面墨痕か	E016
11	44	西工区	SD302	須恵器横瓶		(142)					○		△			ロクロナデ		ロクロナデ	5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色	高松産	E022
	45	西工区	SD303	須恵器坏蓋		(19)		136		2	◎				ロクロナデ		ロクロナデ		N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	末産	S002
	46	西工区	SD303	須恵器坏身	122	(34)					△				ロクロナデ		ロクロナデ		10Y7/ 灰白色	10Y7/ 灰白色	南加賀産	S003
	47	西工区	SD303	土師器器台		(34)			30	頸12	○			○		ミガキ		ナデ	7.5YR7/6 橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色		S001
	48	西工区	SD303	陶器甕	254	(116)			257	1	○		△		ナデ	タタキ	ナデ	ナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	珠洲焼	S004
	49	西工区	SD304	土師器壺	104	(61)			83	6	○			△	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	2.5YR8/2 灰白色	2.5YR8/2 灰白色	S006と同一個体	S005
	50	西工区	SD304	土師器壺	9	(72)	122	20		胴10	○			△		ミガキ		ミガキ	2.5YR8/2 灰白色	2.5YR8/2 灰白色	S005と同一個体	S006
	51	西工区	SD304	須恵器横瓶		(96)										ロクロナデ		ロクロナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	高松産・ヘラ記号「二」	T006
	52	西工区	SD306	須恵器坏身	130	32		88		2	○		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色	高松産・内面墨痕か・外面煤付着	S007
	53	西工区	SD306	須恵器坏身		(24)		100		底3	◎					ロクロナデ・ヘラ切り		ロクロナデ	N6/ 灰色	N6/ 灰色	末産	S008
	54	西工区	SD307	須恵器坏蓋	140	(47)				3	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/ 灰色	N7/ 灰白色	外面降灰・溶着痕	S010
	55	西工区	SD307	須恵器坏身	128	37		94		5	○		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR7/1 灰白色	7.5YR7/1 灰白色	高松産	S009

図版	番号	調査区	遺構	器種	法量(mm)					遺存度	胎土				調整				色調		備考	実測番号
					口径	器高	胴径	底径	頸径		砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	外面	内面		
11	56	西工区	包含層	土師器甕	178	(66)			158	2	◎			△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR7/6 橙色		M011
	57	西工区	包含層	須恵器壺		(98)			204	頸2	○					ロクロナデ		ロクロナデ	5Y4/1 灰色	N5/ 灰色	斜行短線文　沈線5条	N013
	58	西工区	包含層	磁器碗	178	(38)				1					ロクロナデ		ロクロナデ			5Y6/1 灰色	白磁・玉縁・中国産	T063
	59	西工区	包含層	須恵器坏身		(16)		112		底5	○					ロクロナデ		ロクロナデ	N6/灰色	N6/灰色	高松産　袋文字「大」	T062
12	60	西工区	SD308	土師器甕	226	(193)			184	2	○		△	◎	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	2.5Y8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	内面指頭圧痕・外面煤付着	E033
	61	西工区	SD308	土師器甕	146	(66)			128	1	○		○	○	ナデ	ハケ	ヨコナデ	ケズリ	7.5YR8/3 浅黄橙色	5YR7/4 にぶい橙色		T025
	62	西工区	SD308	土師器甕	164	(121)	224		138	2	◎		◎	○	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色		E029
	63	西工区	SD308	土師器甕	129	(85)	158		112	2												Q013
	64	西工区	SD308	土師器甕	156	(91)			122	3	○		△		ナデ	ハケ	ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色		N025
	65	西工区	SD308	土師器甕	174	(82)			142	3	◎								7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色	頸部内面指頭圧痕	N026
	66	西工区	SD308	土師器甕	158	(73)			128	11	◎		△	○	ナデ		ナデ	ケズリ	7.5YR8/3 浅黄橙色	5YR8/4 淡橙色	外面煤付着　内面指頭圧痕	Q016
	67	西工区	SD308	土師器甕	222	(71)			174	2	◎		△	△	ナデ		ナデ		7.5YR7/6 橙色	10YR8/3 にぶい黄橙色	口縁部煤付着	Q012
	68	西工区	SD308	土師器甕	152	(109)			124	4	◎	△	△	◎					5YR7/6 橙色	7.5YR7/6 橙色	外面煤付着　内面指頭圧痕	Q017
	69	西工区	SD308	土師器甕	162	(58)			140	2	○			○	ナデ	ハケ	ナデ	ハケ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR5/1 褐灰色	内外面煤付着	E032
	70	西工区	SD308	土師器甕		(140)	164		107	胴7	○		△			ハケ・ケズリ		ケズリ	7.5YR7/3 にぶい橙色	7.5YR6/3 にぶい褐色	外面煤付着	Q014
13	71	西工区	SD308	土師器壺	158	(179)	232		108	5	◎		△	◎	ハケ	ハケ	ナデ	ケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙色	5YR7/3 にぶい橙色	内面形成痕	E031
	72	西工区	SD308	土師器壺	175	(140)			120	1	○		△	○	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	7.5YR8/4 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色	外面煤付着　内面指頭圧痕	Q015
	73	西工区	SD308	土師器壺	164	(62)			116	1	○				ミガキ・ナデ		ミガキ・ナデ		10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色		N023
	74	西工区	SD308	土師器壺	138	(52)			102	1	△			○	ナデ・ハケ		ナデ		7.5YR8/3 浅黄橙色	5YR5/3 にぶい橙色		T024
	75	西工区	SD308	土師器壺		(125)			121	頸9	◎		△	○		ハケ		ナデ・ケズリ	2.5YR8/1 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	内面形成痕	E030
	76	西工区	SD308	土師器壺		(130)	222			頸2	◎		△			ハケ・ナデ		ナデ・ケズリ	10YR7/2 にぶい黄橙色	10YR8/2 灰白色		N024
	77	西工区	SD308	土師器無頸壺	86	(66)				1	○		△	△					N3/ 暗灰色	10YR8/2 灰白色		T030
	78	西工区	SD308	土師器壺	106	80	86	26	80	7	○								7.5YR7/4 にぶい橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色		N022
	79	西工区	SD308	土師器壺	90	74	73	30	68	10	○	△	○	○					5YR7/6 橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色		N030
	80	西工区	SD308	土師器壺	92	70	63	18	58	5	△			△					7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色		N028
	81	西工区	SD308	土師器壺		(60)	84		54	胴11	△								7.5YR8/4 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色		N021
	82	西工区	SD308	土師器壺	90	67	63	16	56	6	○								5YR7/4 にぶい橙色	5YR8/4 淡橙色		N029
	83	西工区	SD308	土師器壺		(68)	96	24	57	胴12	◎			◎		ハケ		ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色	外面黒斑・内面接合痕	N032
	84	西工区	SD308	土師器壺		(56)	92	18	57	底12	○	○	△				ナデ	ハケ	10YR8/2 灰白色	10YR5/1 褐灰色		N031
	85	西工区	SD308	土師器壺		(114)	120	25	112	胴3	◎		△			ミガキ		ケズリ・ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/3 浅黄橙色		N027
	86	西工区	SD308	土師器把手	長さ 60	幅 42	厚さ 34				○					ハケ		ケズリ	10YR6/1 褐灰色	2.5YR7/6 橙色		Q006
	87	西工区	SD308	土師器把手	長さ 69	幅 63	厚さ 55				○					ナデ・ハケ		ケズリ	5Y4/1 灰色	2.5YR7/6 橙色		Q005
	88	西工区	SD308	土師器把手	長さ 70	幅 60	厚さ 71				◎			△	ナデ				10YR8/3 浅黄橙色	10YR7/2 にぶい橙色		T029
14	89	西工区	SD308	土師器高坏	156	(108)			28	10	○		△		ミガキ・ナデ	ミガキ	ミガキ・ナデ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色		N020
	90	西工区	SD308	土師器高坏	162	(109)			30	6	◎	△	△	○	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色		T021
	91	西工区	SD308	土師器高坏	158	110		97	31	6	△			△			ハケ・ミガキ		7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色		T022
	92	西工区	SD308	土師器高坏	138	120		106	30	1	◎	○	△	○	ナデ	ミガキ	ミガキ	ハケ・ナデ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	脚内面工具痕	T020
	93	西工区	SD308	土師器高坏	150	(60)				10	○	△		○	ナデ		ハケ・ナデ		7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色		T015
	94	西工区	SD308	土師器高坏	156	(59)				4	△			◎					7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色		T017
	95	西工区	SD308	土師器高坏		(89)		110	28	裾3	△	△		◎		ハケ		ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR8/4 浅黄橙色		T018
	96	西工区	SD308	土師器器台		(97)		118	36	裾12	○		△	◎				ナデ	7.5YR8/2 灰白色	7.5YR8/2 灰白色	内外面赤彩	T016
	97	西工区	SD308	土師器器台		(37)		110		底8	○					ミガキ		ハケ・ナデ	7.5YR8/2 灰白色	7.5YR8/3 浅黄橙色		N019
	98	西工区	SD308	土師器土錘	76	42	41			12	◎			△	ナデ					10YR8/2 灰白色	穴径12㎜	T027
	99	西工区	SD308	土師器土錘	55	37	33			12	△	△		△	ナデ					2.5Y7/1 灰白色	穴径12㎜	T026
	100	西工区	SD308	土師器土錘	40	10	9			12	◎			△	ナデ					2.5Y8/2 灰白色	穴径4㎜	T028
	101	西工区	SD308	須恵器甕	176	(240)	260		128	2	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ ハケ・タタキ	ロクロナデ	タタキ	5Y7/1 灰白色	5Y8/1 灰白色		N018
	102	西工区	SD308	須恵器壺	159	(44)			133	1	△				ロクロナデ・波状文		ロクロナデ		N7/ 灰白色	2.5Y3/1 黒褐色	南加賀産・口縁内面降灰	Q010
	103	西工区	SD308	須恵器壺		(46)			60	頸4	△				ロクロナデ		ロクロナデ		5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色	口縁内面降灰・SD317接合	M015
	104	西工区	SD308	須恵器壺		(78)			104	頸4	○					ロクロナデ		ロクロナデ	N7/ 灰白色	2.5YR8/1 灰白色	古墳時代　頸部沈線3条	N010
15	105	西工区	SD308	須恵器坏身	124	45		62		2	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/0 灰色	N6/0 灰色	古墳時代	N008
	106	西工区	SD308	須恵器坏蓋	146	(42)				4	△				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	N6/ 灰色	古墳時代・SD317接合	N017
	107	西工区	SD308	須恵器坏蓋	140	(47)				2	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR6/2 褐灰色	7.5YR6/1 褐灰色	頂部ヘラ削り	T033
	108	西工区	SD308	須恵器坏蓋	138	4000		76		2	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	N7/ 灰白色	N4/ 灰色		Q007
	109	西工区	SD308	須恵器坏蓋	136	(38)				2	○		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色		T034

図版	番号	調査区	遺構	器種	法量(mm)					遺存度	胎土				調整				色調		備考	実測番号
					口径	器高	胴径	底径	頸径		砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	外面	内面		
15	110	西工区	SD308	須恵器坏身	114	(47)	146	38		4	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N8/灰白色	N8/灰白色	外面降灰付着　歪み大	T031
	111	西工区	SD308	須恵器坏身	142	52	162	78		1	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y7/1灰白色	N7/灰白色		T040
	112	西工区	SD308	須恵器坏身	120	45	146	84		4	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N8/灰白色	N8/灰白色		T039
	113	西工区	SD308	須恵器坏身	119	44	140	82		2	◎				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR6/1褐灰色	10R5/1赤灰色		T037
	114	西工区	SD308	須恵器坏身	142	33	162	110		1	◎				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR7/4にぶい橙色	2.5YR6/4にぶい橙色		T038
	115	西工区	SD308	須恵器坏身	126	33	152	70		3	◎				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N7/灰白色		T036
	116	西工区	SD308	須恵器坏身	108	33	128	50		3	○		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N8/灰白色		T035
	117	西工区	SD308	須恵器坏身		(22)		54		底1	△		△			ロクロナデ		ロクロナデ	N6/灰色	N6/灰色	3か所割高台	Q009
	118	西工区	SD308	須恵器壺	135	(78)			107	3	△		◎		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5PB6/1青灰色	N5/灰色	内面接合痕	Q011
	119	西工区	SD308	須恵器坏身	136	28		96		2	○	△			ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/1灰白色	5Y7/1灰白色	高松産	N007
	120	西工区	SD308	須恵器坏身	120	37		70		2	△				ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5YR8/1灰白色	2.5YR8/1灰白色		N006
	121	西工区	SD308	須恵器坏身	148	40		102		5	◎		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N5/灰色	末産	N015
	122	西工区	SD308	須恵器坏身	152	40		100		底3	◎				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	N8/灰白色	N6/灰色	末産	N014
	123	西工区	SD308	須恵器坏身	117	40		81		8	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り・ナデ	N7/灰白色	N7灰白色	高松産	Q008
	124	西工区	SD308	須恵器鉢	144	70	144	24	136	3	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/灰白色	N6/灰色	高松産	N016
	125	西工区	SD308	須恵器甕	140	(60)	168		137	1	○				ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5P7/1明紫灰色	5RP7/1明紫灰色		N012
	126	西工区	SD308	須恵器横瓶	88	(190)	228			6	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N7/灰色	高松産・側面接合痕	M013
	127	西工区	SD308	須恵器角杯？		(91)		22		底1	△					ケズリ		ナデ	N6/灰色	N6/灰色	角杯又は獣脚か	M012
	128	西工区	SD308	須恵器壺	78	(70)				1	○				ロクロナデ		ロクロナデ		N7/灰白色	N7/灰白色	沈線4条	T041
16	131	西工区	SD309	土師器壺		(74)	96	10	69	底12	◎			○		ハケ		ナデ	10YR6/8赤橙色	2.5YR7/4淡黄橙色		M010
	132	西工区	SD310	須恵器鼓		(62)	96	10	58	胴12	△					ロクロナデ・短沈線文		ロクロナデ・	N6/灰色	N6/灰色	注ぎ部穿孔残・肩部降灰	M009
	133	西工区	SD310	須恵器坏身	162	29		100		3					ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	高松産	M007
	134	西工区	SD311	土師器甕	212	(61)			184	1	○		△	△	ハケ	ハケ	ナデ	ハケ	7.5YR8/4浅黄橙色	7.5YR8/4浅黄橙色		S012
	135	西工区	SD311	土師器甕	130	(45)			113	2	○			△	ナデ	ナデ	ナデ	ケズリ	5YR8/4淡橙色	5YR8/4淡橙色		S011
	136	西工区	SD311	土師器壺	70	70	102	19	63	12	○	△	△	○	ナデ	ミガキ	ナデ	ハケ	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	外面赤彩	M003
	138	西工区	SD311	須恵器坏身	160	42		88	182	2	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	SD304・SD308・SD317接合	T005
	139	西工区	SD311	須恵器鉢	160	(57)	163		154	2	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	N4/灰色	N6/灰色	SD317接合	M004
	140	西工区	SD311	須恵器坏身	110	(50)			140	2	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N8/灰白色	N8/灰白色	外面降灰	S013
	141	西工区	SD313	須恵器坏身		(22)		100		底2	○		△			ロクロナデ		ロクロナデ・ヘラ削り	N7/灰白色	N7/灰白色	高松産	E006
	142	西工区	SD314	土師器椀	125	(35)				1	○	◎		△	ナデ		ヘラミガキ		10YR6/2灰黄褐色	N3/暗灰色	内面黒色	E009
	143	西工区	SD314	土師器壺	88	(55)				2	○				ヘラミガキ		ヘラミガキ		2.5YR6/6橙色	2.5YR7/4淡黄橙色	内外面赤彩	E007
	144	西工区	SD314	土師器壺		(25)		38		底12	○		△	△		ハケ・ナデ		ヘラケズリ	10YR7/1灰白色	10YR8/4浅黄橙色		E008
	145	西工区	SD314	土師器蓋		(25)			摘15	摘1	◎			△					2.5Y7/2灰黄色	10YR8/2灰白色		E010
	146	西工区	SD314	土師器高坏		(26)		188		底2	○					ミガキ		ミガキ・ハケ	10YR6/2灰黄褐色	N3/暗灰色	内面煤付着	E005
	148	西工区	SD319	土師器椀	156	(41)				1	○	◎		△				ミガキ	10YR7/4にぶい黄橙色	N3/暗灰色	内面黒色	T059
	149	西工区	SD323	須恵器高坏		(48)			43	脚12	○		○			ロクロナデ		ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	高松産	T060
	150	西工区	SD328	土師器壺	176	(55)			102	1	○			△	ナデ		ナデ		2.5Y8/2灰白色	10YR8/2灰白色		T058
	151	西工区	SD329	土師器土錘	36	34	28			12					ナデ					10YR8/2灰白色	穴径6㎜	T057
17	152	西工区	SD317	土師器甕	316	(315)	364		272	10	○		◎	△	ナデ	ハケ・ナデ	ナデ	ケズリ	5YR7/6橙色	5YR7/6橙色	擬凹線8条・口縁部煤f着・胴部黒斑	N046
	153	西工区	SD317	土師器甕	280	(83)			234	3	○	○		△	ナデ			ケズリ	5YR8/3淡橙色	5YR8/3淡橙色	擬凹線9条・外面煤付着・M022と同一個体か	M023
	154	西工区	SD317	土師器甕	182	259	210	41	154	4	△		○	△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	擬凹線4条・胴部外面煤付着	M021
	155	西工区	SD317	土師器甕	136	(105)	158		112	4	◎		△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	7.5YR7/3にぶい橙色	10YR7/3にぶい黄橙色	擬凹線4条・胴部外面煤付着	N053
	156	西工区	SD317	土師器甕	208	(76)			159	2	◎				ナデ		ナデ	ケズリ	10YR8/2灰白色	10YR8/1灰白色		N052
18	157	西工区	SD317	土師器甕	204	(195)	284		188	9	◎		△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ハケ・ケズリ	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/3にぶい黄橙色		N054
	158	西工区	SD317	土師器甕	248	(184)	292		224	11	○		△	○	ナデ	ハケ	ハケ・ナデ	ケズリ	10YR7/2にぶい黄橙色	10YR7/2にぶい橙色	口縁部胴部煤付着	T049
	159	西工区	SD317	土師器甕	294	(188)	322		256	7	◎		◎	◎	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	7.5YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色	胴部外面煤付着	T043
19	160	西工区	SD317	土師器甕	156	268	220	20	136	3	○	○	△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR6/1褐灰色	胴部煤付着	T050
	161	西工区	SD317	土師器甕	148	258	228	28	142	底12	◎		△	◎	ナデ	ハケ		ハケ	5YR6/4にぶい橙色	N4/灰色		E051
	162	西工区	SD317	土師器甕	174	(134)			144	3	◎		△	◎	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	7.5YR7/3にぶい橙色	7.5YR7/4にぶい橙色	頸部内面指頭圧痕	E049
	163	西工区	SD317	土師器甕	152	(123)	212		124	4	◎			△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	内外面煤付着	N044
	164	西工区	SD317	土師器甕	170	(173)	220		132	3	△			△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	7.5YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色	胴部内外面煤付着・肩部内面指頭圧痕	M019
	165	西工区	SD317	土師器壺	127	256	223	60	107	3	○	○	○			ハケ			10YR7/2にぶい黄橙色	10YR6/1褐灰色		E039
20	166	西工区	SD317	土師器壺	236	(29)				8	○	△		△	ナデ・ミガキ		ミガキ		10YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	円形浮文3個	T053

図版	番号	調査区	遺構	器種	法量(mm)					遺存度	胎土				調整				色調		備考	実測番号
					口径	器高	胴径	底径	頸径		砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	外面	内面		
20	167	西工区	SD317	土師器壺	180	(35)				1	◎			△	矢羽状短沈線文		短沈線文		10YR7/2にぶい黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	口縁外面列状突起	E037
	168	西工区	SD317	土師器壺	138	232	198	30	119	6	○		○	△	ナデ	ハケ	ナデ	ヘラケズリ	10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	底部指頭圧痕残	T045
	169	西工区	SD317	土師器壺	114	(223)	240		104	5	◎		○	○	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ・ナデ	7.5YR8/2灰白色	5YR7/1灰白色	頸部・底部指頭圧痕残	T044
	170	西工区	SD317	土師器壺	162	(144)			120	1	◎		△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	10YR8/4浅黄橙色	10YR8/4浅黄橙色		M020
	171	西工区	SD317	土師器壺	160	(72)			108	4	○				ナデ・ミガキ	ハケ・ミガキ	ミガキ	ハケ	10YR5/4にぶい黄橙色	10YR5/4にぶい黄橙色	内外面鉄分付着	E034
	172	西工区	SD317	土師器壺	149	(64)				6	○			△			ハケ		7.5YR8/3浅黄橙色	10YR8/2灰白色	貼付突起2個残	Q032
	173	西工区	SD317	土師器甕	151	(78)			100	5			△		ナデ	ハケ		ケズリ	7.5YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色		M018
	174	西工区	SD317	土師器壺		(137)			86	頸12	○			△		ミガキ			7.5YR8/2灰白色	7.5YR8/1灰白色	外面赤彩・口縁外面キザミ	M017
	175	西工区	SD317	土師器壺	196	(113)			120	8	◎		○	△					7.5YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/4浅黄橙色	口唇部凸帯接合痕	N045
21	176	西工区	SD317	土師器台付壺	92	(180)	176		78	2	◎		△		ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケ	10YR7/1灰白色	10YR7/1灰白色	外面赤彩・口唇部貼付突起	T047
	177	西工区	SD317	土師器壺	100	126	128	20	80	12	◎		△	◎	ミガキ・ナデ	ミガキ	ミガキ	ケズリ・ナデ	5YR7/2明褐灰色	7.5YR8/2灰白色	外面赤彩	E038
	178	西工区	SD317	土師器壺	102	152	138	50	76	3	○	○	○	◎					2.5YR6/6橙色	N3/暗灰色	胴部外面黒斑・内面接合痕	T042
	179	西工区	SD317	土師器壺		(141)	156	34	51	底12	◎			○		ミガキ		ハケ	10YR7/2にぶい黄橙色	2.5Y3/1黒褐色		E050
	180	西工区	SD317	土師器壺	75	82	136	17	74	底12	○				ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナデ	10YR6/6明黄褐色	7.5YR7/.4浅黄橙色	口縁内面・外面赤彩・内面指頭圧痕	M016
	181	西工区	SD317	土師器壺	42	63	114	12	44	4	△			△	ミガキ	ミガキ	ナデ	ナデ	5YR7/3にぶい橙色	5YR7/4にぶい橙色	頸部穿孔2個残	N056
	182	西工区	SD317	土師器壺	32	40	62	10		3	◎			△	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙色	10YR4/1褐灰色		N060
	183	西工区	SD317	土師器壺	42	48	43	18	44	2	△								10YR8/3浅黄橙色	10YR8/2灰白色	外面黒斑	N059
	184	西工区	SD317	土師器壺	62	(45)	68		58	2	◎			△	ナデ	ハケ	ナデ		10YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色		N061
	185	西工区	SD317	土師器壺	60	(55)	76		48	11	◎	△		△		ハケ	ナデ		10YR8/3浅黄橙色	10YR4/1褐灰色	頸部内面指頭圧痕	N058
	186	西工区	SD317	土師器有孔鉢	152	146		30		5	◎			◎				ケズリ	10YR8/2灰白色	10YR7/3にぶい黄橙色	穴径11㎜	E048
	187	西工区	SD317	土師器蓋	160	52		32	摘28	1	○			○	ミガキ		ナデ		10YR7/3にぶい黄橙色	7.5YR6/1褐灰色	内面煤付着	N062
	188	西工区	SD317	土師器蓋	38	38		24	頸21	1	○			△	ミガキ		ナデ		7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/3にぶい橙色		N063
	189	西工区	SD317	土師器蓋	60	29		摘20	17	摘3	○					ミガキ		ナデ	10R5/6赤色	5YR7/6橙色	外面赤彩・摘部穿孔2個残	N064
	190	西工区	SD317	土師器甑把手		(55)				胴1	○			◎		ナデ		ハケ・ミガキ	5Y3/1オリーブ黒色	10YR8/2灰白色		E036
	191	西工区	SD317	土師器土錘	43	46	45			12	○				ナデ				10YR8/2灰白色		穴径11㎜	N066
	192	西工区	SD317	土師器土錘	38	39	36			12	○				ナデ				10YR7/3にぶい黄橙色		穴径10mm	N065
	193	西工区	SD317	土師器土錘	23	52	51			12	△	△	△		ナデ				10YR5/2灰黄褐色		穴径8㎜	Q029
	194	西工区	SD317	土師器土錘	21	30	27			12	△			△	ナデ				10YR7/2にぶい黄橙色		穴径6㎜	Q030
	195	西工区	SD317	土師器土錘	24	27	28			12	△			△	ナデ				2.5Y5/1黄灰色		穴径6㎜	Q031
22	201	西工区	SD317	土師器器台	256	(138)			38	2	△		△	○	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ナデ	7.5YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色	内外面赤彩	T051
	202	西工区	SD317	土師器器台	226	159		142	102	2	◎		△	△	ミガキ	ミガキ	ミガキ		10YR8/2灰白色	10YR8/2灰白色	透かし穴2個残	T048
	203	西工区	SD317	土師器装飾器台		(145)	166	134	34	頸6	◎		○	○		ミガキ			7.5YR8/3浅黄橙色	5YR7/6橙色	透かし穴4個残	T054
	204	西工区	SD317	土師器器台		(98)	224		40	受10	△					ミガキ	ミガキ	ナデ	10YR7/1灰白色	10YR6/1褐灰色	類滴形透かし	N050
	205	西工区	SD317	土師器器台		(93)			40	頸12	○			○					7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR8/4浅黄橙色	受け部透かし穴5個残	N035
	206	西工区	SD317	土師器高坏	164	105		116	35	4	△		○						7.5YR7/4にぶい橙色	7.5YR7/2明褐灰色	透かし穴3個残	N049
	207	西工区	SD317	土師器台付椀	139	103		86	35	1	△		△	◎					7.5Y7/4にぶい橙色	N3/暗灰色	内面黒色処理	T046
	208	西工区	SD317	土師器高坏		(93)		140	38	裾9	○		△	△		ミガキ		ナデ	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/2灰白色	透かし穴5個残	N037
	209	西工区	SD317	土師器器台		(76)		83	29	裾8	◎		△	△		ミガキ	ミガキ	ナデ	5YR7/8橙色	2.5YR7/6橙色	内外面赤彩・受部キザミ・接合痕	N048
	210	西工区	SD317	土師器高坏		(70)		180	30	裾3	△			○		ハケ		ナデ	7.5YR8/4浅黄橙色	7.5YR7/6橙色		N036
	211	西工区	SD317	土師器高坏		(60)		122	35	裾8	○					ミガキ		ハケ・ナデ	10R5/6赤色	7.5YR7/2明褐灰色	外面赤色	N055
	212	西工区	SD317	土師器高坏		(78)		110	30	裾6	○	○		△		ミガキ		ナデ	10YR8/2灰白色	10YR7/2にぶい橙色		N040
	213	西工区	SD317	土師器脚部		(85)		136	41	裾3				△		ミガキ		ナデ	10YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色	内面煤付着・脚部外面未穿孔穴4個残	N038
	214	西工区	SD317	土師器高坏		(85)		127	35	裾10	△	△		△		ミガキ		ナデ	10YR7/3にぶい黄橙色	10YR3/1黒褐色	内外面煤付着	N047
23	215	西工区	SD317	土師器器台	95	(73)			35	10	○			△					10R6/6赤橙色	2.5YR7/6橙色	透かし穴3個残	Q019
	216	西工区	SD317	土師器器台	90	85		130	35	9				△		ミガキ			5YR8/4淡橙色	5YR8/3淡橙色	透かし穴4個残	N043
	217	西工区	SD317	土師器器台	78	85		100	28	裾8	◎		◎	◎					7.5YR8/2灰白色	5YR7/4にぶい橙色	透かし穴3個残	T052
	218	西工区	SD317	土師器高坏	120	(45)				1	○			△					5YR7/6橙色	5YR5/6明赤褐色		N041
	219	西工区	SD317	土師器器台		(60)		114		裾5	△			△					5YR7/4にぶい橙色	5YR7/6橙色	透かし穴3個残	N042
	220	西工区	SD317	土師器台付壺		(85)	156		42	胴10	○			△		矢羽状短沈線文2条			7.5YR8/3浅黄橙色	10YR8/3浅黄橙色	内外面赤彩・外面煤付着	N051
	221	西工区	SD317	土師器台付碗		(80)	92	52		底5	○			△		ミガキ		ミガキ	7.5YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色		N057
	222	西工区	SD317	土師器台付碗		(30)		78		9	△								2.5YR6/6橙色	2.5YR7/6橙色		N039
	223	西工区	SD317	土師器壺		(47)		66		底2	△	○	○			ハケ		ナデ	2.5Y5/1黄灰色	2.5Y7/2灰黄色		E035
	224	西工区	SD317	土師器甕		(260)	318		40	底12	○		○	△		ハケ		ケズリ	7.5YR8/3浅黄橙色	7.5YR8/3浅黄橙色	外面煤付着・M023と同一個体か	M022

図版	番号	調査区	遺構	器種	法量(mm)					遺存度	胎土				調整				色調		備考	実測番号
					口径	器高	胴径	底径	頸径		砂	骨	礫	赤	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	外面	内面		
24	229	西工区	SD317	須恵器 坏蓋	140	52				底3	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N6/灰色		M028
	230	西工区	SD317	須恵器 坏蓋	137	50				底8	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N6/灰色		M025
	231	西工区	SD317	須恵器 坏蓋	145	32					△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y5/1 黄灰色	10YR7/1 灰白色		Q028
	232	西工区	SD317	須恵器 坏身	113	51	136	20		2	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N6/灰色		M024
	233	西工区	SD317	須恵器 坏身	121	50	140	54		2	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N8/灰白色	N8/灰白色		Q025
	234	西工区	SD317	須恵器 坏身	116	54	150	32		2	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N5/灰色	N8/灰白色		M029
	235	西工区	SD317	須恵器 坏身	111	44	128	70		2	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/灰白色	N8/灰白色		Q026
	236	西工区	SD317	須恵器 坏身	118	35	140	35		10					ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/灰色	N7/灰白色		M027
	237	西工区	SD317	須恵器 坏身	114	36	136	70		2	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	5PB6/1 青灰色	N7/灰白色		Q027
	238	西工区	SD317	須恵器 聰		(92)	180			2	△					ロクロナデ 短沈線文		ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色		M035
	239	西工区	SD317	須恵器 壺		(85)	133		63	頸7	△				ロクロナデ・波状文	ロクロナデ・連続刺突文	ロクロナデ	ロクロナデ	N5/灰色	N8/灰白色	聰か	Q023
	240	西工区	SD317	須恵器 壺	133	(147)	128		82	底7	◎				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N8/灰白色	N8/灰白色	内外面降灰多・SD311・SD318接合	M033
	241	西工区	SD317	須恵器 壺		(88)	180			頸3	△					ロクロナデ 短沈線文		ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	外面やや摩滅	M034
	242	西工区	SD317	須恵器 壺	220	(55)			166	1	△				ロクロナデ		ロクロナデ		N7/灰白色	N7/灰白色		M030
	243	西工区	SD317	須恵器 高坏		(62)			42	頸12	△		◎			ロクロナデ		ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	高松産	M031
	244	西工区	SD317	須恵器 坏蓋		(26)			摘35	摘12	△					ロクロナデ・ヘラ削り		ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色	高松産	M026
	245	西工区	SD317	須恵器 坏身	114	34		80		4	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	5PB6/1 青灰色	N7/灰白色	高松産	Q022
	246	西工区	SD317	須恵器 坏身	130	31		93		2	△		○		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/灰白色	N8/灰白色	高松産	Q021
	247	西工区	SD317	須恵器 坏身	132	32		105		底4	△				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N9/白色	N9/白色	高松産	M032
	248	西工区	SD317	須恵器 坏身	108	41		79		5	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	N4/灰色	N8/灰白色	南加賀産	Q020
	249	西工区	SD317	須恵器 壺		(107)	196	(84)		胴1	△		△			ロクロナデ		ロクロナデ	2.5YR5/1 黄灰色	N7/灰白色	高松産	Q024
25	250	西工区	SD318	土師器 甕	244	338	278	70	190	6	◎		△	◎	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	胴部外面煤付着・内面炭化物付着	T055
	251	西工区	SD318	土師器 甕	180	(62)			148	8	◎		○						5YR6/6 橙色	5YR6/8 橙色	外面煤付着	N069
	252	西工区	SD318	土師器 甕	160	(48)			142	3	◎				ナデ		ナデ	ヘラケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙色	１０YR6/3 にぶい黄橙色	外面煤付着	N073
	253	西工区	SD318	土師器 壺	128	(110)			88	9	△	○			ナデ	ミガキ	ナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐色	10YR4/1 褐灰色	外面赤彩・擬凹線12条	N074
	254	西工区	SD318	土師器 甕	136	(48)			102	3	◎								7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/2 灰白色		N072
	255	西工区	SD318	土師器 脚部		(93)			42	裾11	○					ミガキ	ナデ	ハケ・ナデ	10YR4/6 赤色	5YR7/6 橙色	外面赤彩・透かし穴2個残	N067
	256	西工区	SD318	土師器 脚部		(50)		144		裾3	○			○		ミガキ		ナデ・ハケ	7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色	透かし穴3個残	N068
	257	西工区	SD318	土師器 椀	108	58		42		6	○		◎	◎	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色		N070
	258	西工区	SD318	土師器 土錘	34	23	23			12	○		△	△	ナデ					10YR8/2 灰白色	穴径4mm	N075
	259	西工区	SD322	須恵器 壺		(123)	103	58	36	底6	○					ロクロナデ・ヘラ削り		ロクロナデ	N6/灰色	N7/灰白色	聰か	E061
	260	西工区	SD322	須恵器 長頸壺	76	(124)			46	2	○		◎		ロクロナデ		ロクロナデ		N7/灰白色	N7/灰白色	高松産	E057
	261	西工区	SD322	須恵器 坏蓋	128	43		60		受1	△		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/灰白色	N7/灰白色		E066
	262	西工区	SD322	須恵器 坏蓋	128	44				2	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N4/灰色	N7/灰白色	SD317接合	E059
	263	西工区	SD322	須恵器 坏身	142	38		76		受1	○		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/1 灰白色	N7/1 灰白色		E060
	264	西工区	SD322	須恵器 坏身	136	39		107		10	○				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR6/1 褐灰色	7.5YR7/4 にぶい橙色	SD317接合	E063
	265	西工区	SD322	須恵器 坏身	134	42		90		12	○		△		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ削り	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR7/4 にぶい橙色	5YR7/3 にぶい橙色		E062
	266	西工区	SD322	須恵器 高坏	94	(49)			34	2	◎				ロクロナデ		ロクロナデ		N6/灰色	2/5Y6/1 黄灰色	脚部割れ高台3カ所か・内面降灰	E055
	267	西工区	SD322	須恵器 高坏		(38)			44	頸12	○					ロクロナデ		ナデ	N6/灰色	N6/灰色	末産	E052
	268	西工区	SD322	須恵器 坏身	116	34	94			1	○		○		ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	10Y6/1 灰色	10Y6/1 灰色	高松産	E054
	269	西工区	SD322	須恵器 坏身	124	31		94		1	◎				ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色	末産	E053

＊法量欄の(　)は現存値を示している。器種により測定位置が摘み部、受け部などの場合、それぞれ「摘－」・「受－」・「台－」・「裾－」とした。
＊胎土欄の「骨」は海面骨針、「赤」は赤色粒を示す。
＊遺存度は口径を指し、それ以外の部位は頸部を「頸」、胴部を「胴」、底部を「底」、高坏・器台では脚部を「脚」、裾部を「裾」とした。

第３表　石器観察表

図版	番号	遺構	器　種	法　量				材質	色調	形態・調整等			備　考	実測番号
				幅	長さ	最大厚	重量			側面	端面	調整等		
9	12	SK308	磨製石斧	119.0	52.0	26.0	272.00	泥岩	N8/ 灰白色	研磨	研磨		刃部欠・柄部敲打痕	T013
9	16	SK317	剥片	15.0	7.0	7.0	0.70	緑色凝灰岩	10G7/1 明緑灰色				穿孔痕か	T007
16	129	SD308	石錘	58.0	115.0	52.0	440.00	中粒砂岩	5Y7/1 灰白色					N034
16	130	SD308	砥石	78.0	150.0	20.0	405.00	凝灰岩	7.5Y7/1 灰白色	敲打痕	敲打痕		両面擦痕	N033
16	137	SD311	敲石	109.0	81.0	38.0	435.00	凝灰岩	N8/ 灰白色	敲打痕	敲打痕			S014
16	147	SD314	磨石	89.0	102.0	31.0	370.00	細粒砂岩	10Y5/1 灰色	敲打痕	敲打痕			E004
21	196	SD317	敲石	117	69	47	440.00	凝灰岩	2.5Y5/1 黄灰色	敲打痕	敲打痕			Q049
21	197	SD317	凹石	103.0	78.0	38.0	370.00	凝灰岩	2.5YR6/6 橙色	敲打痕	敲打痕		被熱により赤化	Q048
21	198	SD317	打製石斧	102.0	63.0	23.0	220.00	凝灰岩	N6/ 灰色				刃部欠損	Q047
21	199	SD317	砥石	65.0	42.0	28.0	83.00	細粒砂岩	2.5Y8/2 灰白色	研磨		４面研磨	方柱状	Q044
21	200	SD317	砥石	88.0	35.0	15.0	50.00	泥岩	N7/ 灰白色	研磨		４面研磨	方柱状	Q043
23	225	SD317	車輪石 未成品	100.0	95.0	39.0	390.00	緑色凝灰岩	10Y7/1 灰白色	成形痕	成形痕	全周剥離	車輪石未成品か	Q050
23	226	SD317	打製石斧	70.0	75.0	19.0	120.00	凝灰岩	7.5Y7/1 灰白色				柄部欠損	Q046
23	227	SD317	磨製石斧	82.0	66.0	44.0	310.00	中粒砂岩	N7/1 灰白色	研磨			柄部欠損・一部凹面	Q045
23	228	SD317	敲石	77.0	62.0	49.0	280.00	凝灰岩	7.5Y7/1 灰白色	敲打痕			背面金属削痕か	Q051

第４表　木製品観察表

図版	番号	遺構	器　種		法　量			樹 種	名 称	備考	実測番号
			材質	形状	長	幅	厚				
26	270	SD302	木器	棒材	425	17	18	広葉樹	弓	芯持丸木	T500
26	271	SD302	木器	棒材	1440	31	33	広葉樹	弓	芯持丸木・黒漆	M500
27	272	SE206	木器	板材	1217	545	40	針葉樹	井戸枠	臍孔2カ所　木釘残	N300
28	273	SE206	木器	板材	1180	527	40	針葉樹	井戸枠	臍孔2カ所　木釘残	E500

第４章　自然化学分析

木曳野遺跡群から出土した木製品の樹種

株式会社　東都文化財保存研究所

１．資料

資料は出土した井戸枠１点（第27図272）、弓２点（第26図270・271）の合計３点である。

２．分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作成し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の複合液）で封入し、プレパラートを作成する。作成したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

３．結果

樹種同定結果を表１に示す。木製品は全て針葉樹材で、２種類（スギ・カヤ）に同定された。各種類の解剖学的特徴を記す。

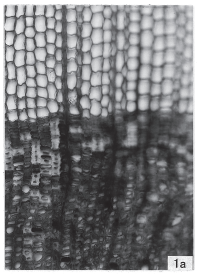
・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f）D.Don）　　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、壁孔は比較的大きく、丸口の長軸方向が水平になるものが多い。１分野に２－４個。放射組織は単列、１－15細胞高。

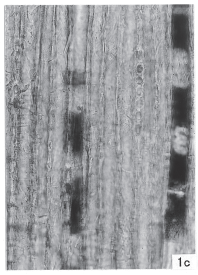
・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb.et Zucc）　　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道・樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には、２本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、１分野に１－４個。放射組織は単列、１－10細胞高。

本地域では、現在カヤの変種であるチャボガヤが生育しているが、カヤは植栽以外に生育していないとされる。カヤが高木になるのに対し、チャボガヤは低木であるが、木材組織は類似しており、組織の特徴からカヤとチャボガヤを分類することは困難である。したがって、本報告のカヤも、変種のチャボガヤの可能性がある。


1a

1b


1c

2a

2b

2c

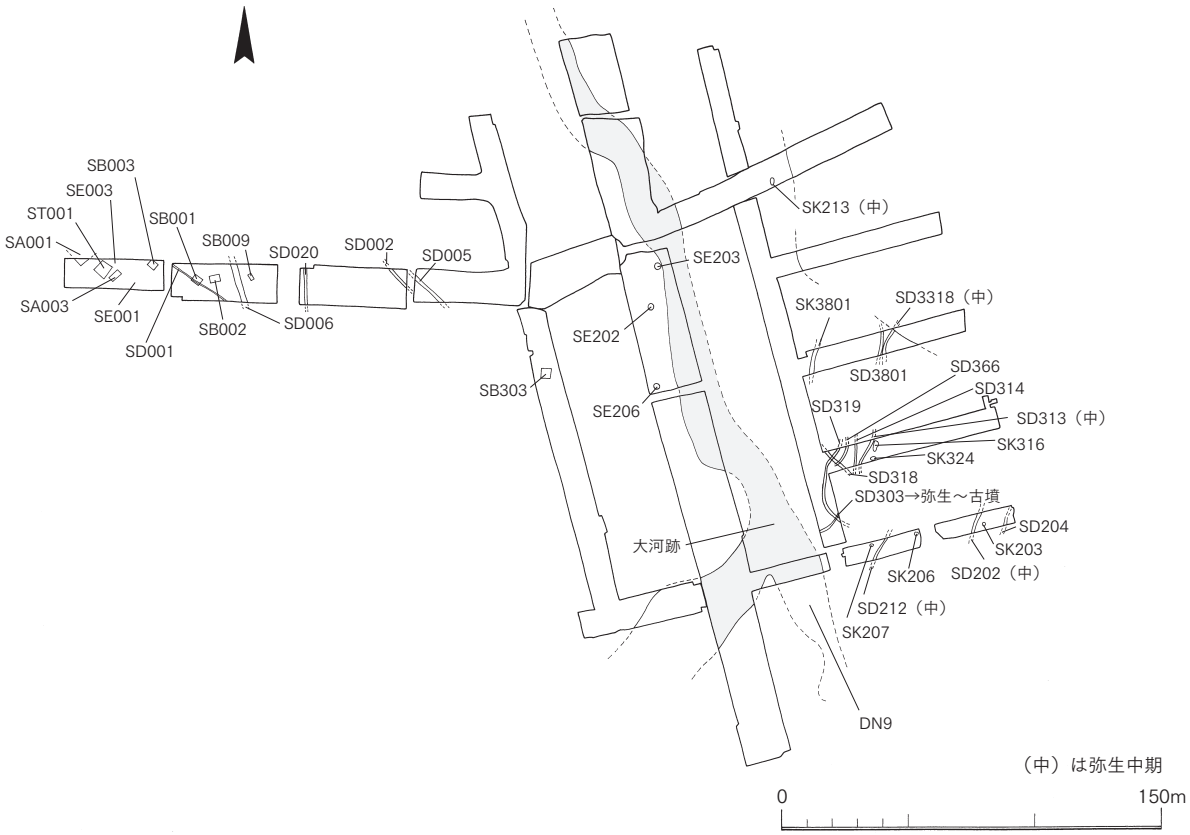
第５章　総　括

第１節　畝田・寺中遺跡の時期別の様相について

調査では合計４か年にわたり13,760㎡に及ぶ調査を実施した。寺中B遺跡と畝田・寺中遺跡の２遺跡について述べることとし、各時代の遺跡の内容について記す。

縄文時代

今回の調査では縄文時代の遺構は確認されていない。出土遺物として、主幹線１区の大川跡より縄文時代晩期の浅鉢が出土している。石川県が調査を行った地点では土坑及び縄文土器の出土が確認されている。畝田・寺中遺跡中に縄文時代の遺跡が存在することは疑いないが、集落の規模や存続年代等に言及できる資料ではない。浅鉢は晩期中頃の玉抱三叉文をもつもので、中屋サワ式期が比定される。このほか、右斜状条痕文を施す大型の深鉢も出土しており、縄文時代の遺跡が展開していたものと考えられる。大川跡は縄文時代晩期には既に開口していたといえよう。



第29図　弥生時代遺構配置図〔S＝１/2,000〕

弥生時代（中期）

弥生時代は中期と後期終末期の２時期について顕著にみることができる。弥生時代中期は畝田・寺中遺跡でみられ、後期終末期は寺中B遺跡に集約される。

畝田・寺中遺跡における弥生中期の溝は県費分１区のSD202・204・212、東工区東西線１区でSD313、314、316、317、318、319、東工区東西線２区でSD3318、SD3801などがある。このうち、SD204は

石川県調査地点でのＶ１区SD12に接続することが確認でき、SD202・212も県調査区中に延伸とみられる落ち込みを見ることができる。溝の規模はいずれも幅が狭くまた浅いため小規模な印象を受ける。これらの溝からは小松市の八日市地方遺跡を初見とする小松式期に属する壺・甕類がみられる。集落を囲む周溝、或いは近傍に設けた区画溝と考えられるが、建物跡等は確認していない。遺構配置を検討するとSD313は東西線２区のSD3318と同一の溝であることがうかがわれる。小規模且つ浅いものではあるが、南西から北東方向に向け展開していたことであろう。これら溝群の共通する特徴として南西方向から北東方向に伸びていることが挙げられる。土坑では県費分A区SK203、B区SK206・SK207、東西線１区SK316、主幹線４区支線部SK213などがある。SK206は小松式期の古相を示し、SK318やSK213は新相にあたる。集落域では、県報告にある北東群に属する遺構であろう。県費分C区南より主幹線南北線１区の大川跡は県調査のDN９の延伸部に当たり、C区西の大川跡へ至る落ち込みはDN９の右岸とみられる。県調査のDN８、DN５・６・８は南北に流れる大きな河川跡で大川跡と同一の河川跡であろう。前述の中期の溝群は河川跡より東に位置するもので県報告の北支群は主幹線４区に至る南北域に展開していたものと推測される。石川県の調査地点ではDN８、DN５・６・８の東に南東群があることから当時の集落は南北方向に長く展開することが考えられる。集落域が南北方向に展開した最大の要因は大川跡がある。縄文晩期に既に開口していた大川跡は弥生中期でも地形の阻害要因たりえるもので、弥生中期の集落はこの川に沿うよう展開し、集落の東に溝を施すことで、集落の結界域としたものであろう。

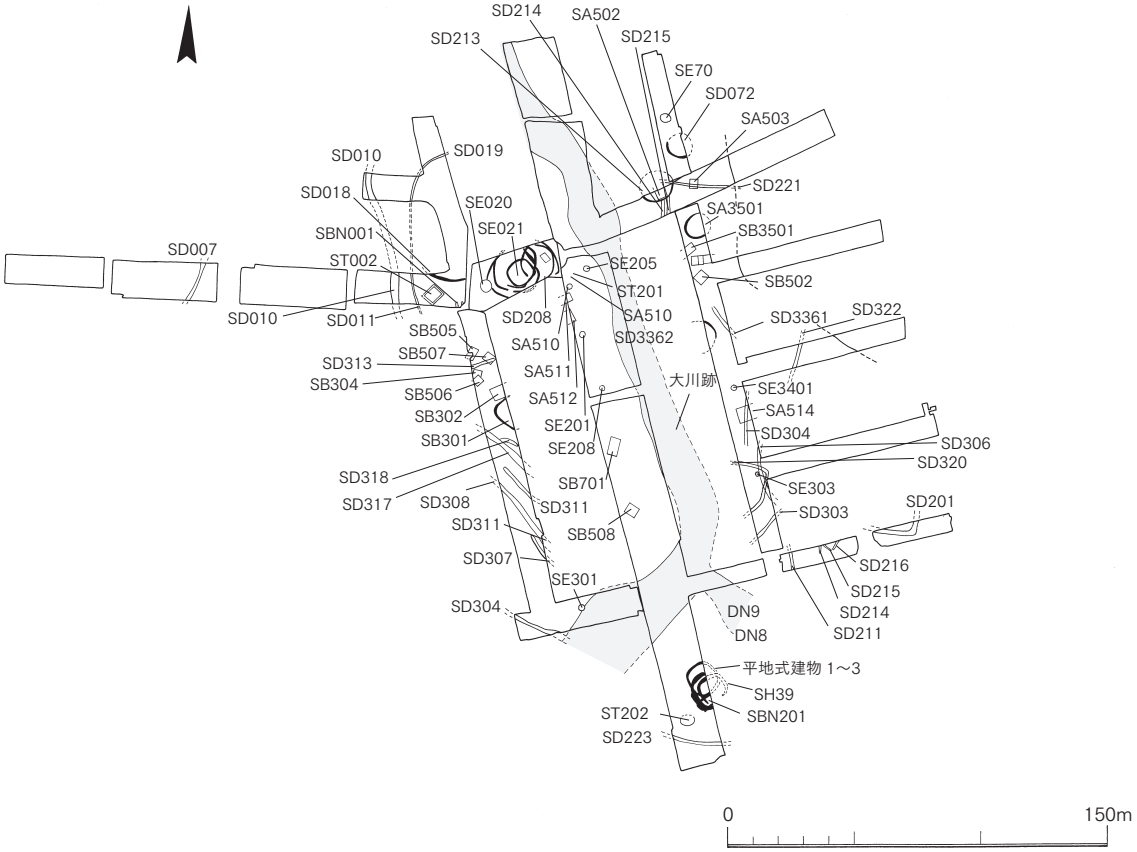
弥生時代（終末期）

弥生時代の終末期から古墳時代前半に至る時期については、いわゆる月影式土器に代表される有段擬凹線甕が盛行する段階を終末期から古墳時代初頭と位置づけ、古墳時代前半期を布留式に代表されるくの字甕及び山陰系の有段部に凸帯を巡らせる甕・壺類の出現を区分の目安とした。また、初期須恵器の出現以降をもって古墳時代中期とする。寺中B遺跡１区より４区までで確認した遺構のほとんどは弥生時代終末期の遺構であった。遺構の錯綜が少なく、また出土した土器も他時期の土器の混ざりがなく、寺中B遺跡の東端部に相当するもので、５区より東と明確に区分できる。竪穴系建物跡では１区ST001、掘立柱建物は１区でSA003、SB003、２区SB001、SB002、SB009がある。磁北より西に50°から30°の範囲に軸を振る建物が多く、基本１間×２間～３間の側柱建物で当遺跡における弥生時代終末の建物の基準といえよう。溝では、２区SD001、SD006、３区SD002、SD020、４区SD005があり、いずれも南東から北西にかけ展開し、建物、溝とも東に向かうにつれ数が減少している。

畝田･寺中遺跡では県費分A区SD204、東西線１区でSD305･SD315･SD317、SK316･SK324などがある。弥生中期の溝と交錯や並走するため、終末期の集落もまた、中期と同じような展開を呈するものとみられる。井戸跡としては１区よりSE001、SE003、主幹線３区よりSE202・SE203・SE206の５基がある。井戸枠に繰り抜きの木材を用いるものが多く、底板を有する複雑な構造のものもある。井戸枠中より依存度の良い土器を検出したものは井戸祭祀に関するものであろう。主幹線で検出したSE202、SE203、SE206はいずれも大川跡などの南北に流れる流路に接する地点に位置し、この周辺では溝や土坑など当該時期の遺構はほかに見当たらない。

古墳時代

畝田・寺中遺跡のうち、最も遺跡の規模が拡大した時期は古墳時代前期から中期に至る段階である。東西では東工区から西工区に至る範囲、南北では主幹線１区より主幹線５区に至るほぼ全域で当該時



第30図　古墳時代遺構配置図〔S＝１/2,000〕

期の遺構を確認している。円形に巡る周溝を有する建物跡の分布をみると寺中B遺跡５区で平地式建物１～６、主幹線１区で平地式建物１・SD235、同２・SD227・SD237、同３SD236、西工区から３度の建て替えを有するSB301などがある。平地式建物１・SD235は県調査における弥生の周溝建物の可能性について言及されたSD10と古墳時代の周溝建物の一部と解されるSH39が重複のみられる溝の延伸部分に当たる。この周辺において弥生時代中期から後期に属する遺物の出土はみられないことから、古墳時代の建物と判断できよう。いずれも同一地点で３回から最大５回に及ぶ建て替えを確認できる。また東工区南北線３区から４区にまたがる範囲でSD213やSD3501も平地式建物の周溝と考えられる。また、方形に区画を呈する溝では４区ST002、県費分１区SD201、東西線１区SD320などがある。ST002は小型の竪穴系建物の周溝域を示すもので、周溝を持たず、平面が円形を呈すものとして主幹線１区ST202も竪穴系建物の可能性がある。

溝では集落を囲む周溝と、建物や土坑など当時の生活域に必要とされた区画溝などが確認されている。周溝のうち、４区SD310、SD311と４－２区SD310、SD019は古墳時代前期の集落を囲む溝の北西域を示すもので、この溝より西及び北方向で建物跡や土坑などは確認さず、SD010より西に離れた地点の１区SD007が最も外郭域となる。西工区SD304、SD317及びSD308の３条は前述の溝３条と対応するものとみられ、SD007からSD010の区間およびSD304からSD308の区間の遺構密度は比較的空虚な様相を呈し、SD308及びSD310より東の遺構密度と明らかに異なるため、当該時期の集落の展開域はこれら３条の溝より東に中心を置くことがわかる。主幹線１区から５区までの南北軸を中心に建物跡は東西に広く広範囲にわたり展開するが、東側に展開するものは県調査における北群、西のもの

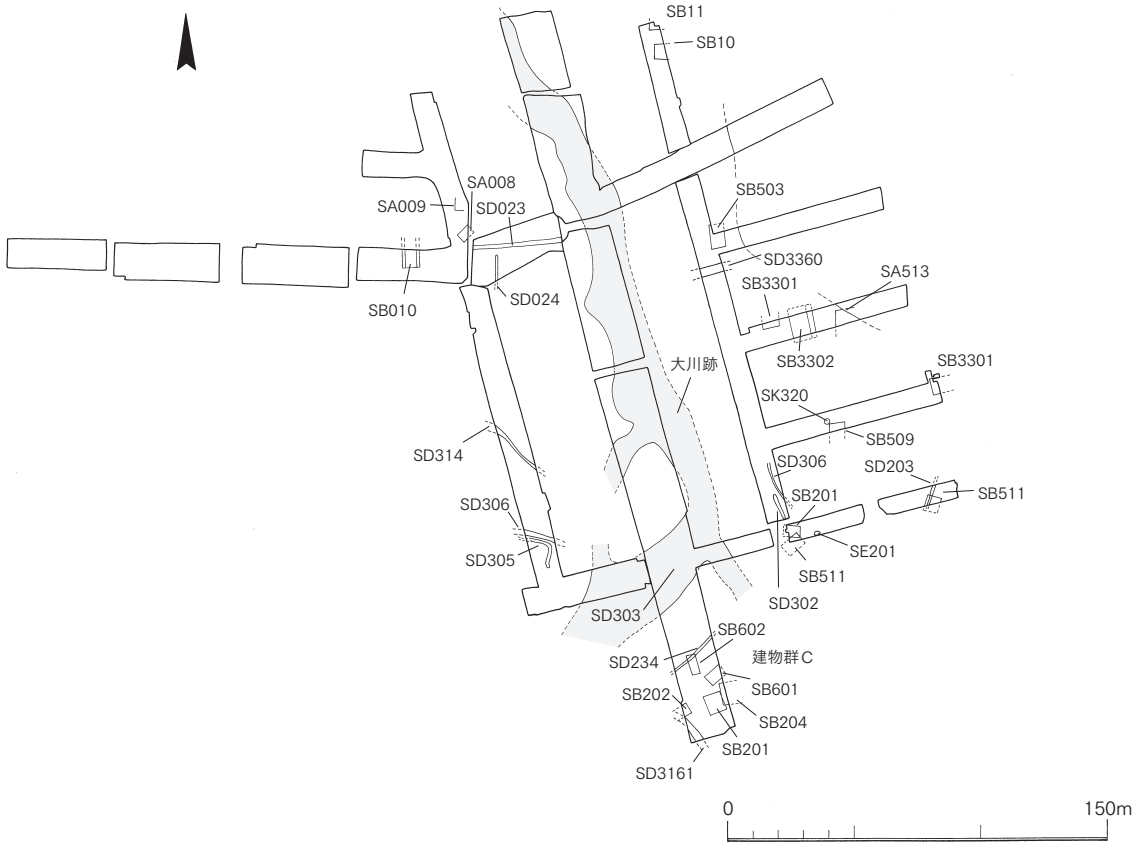
は北西群の延伸域に当たると見られよう。

井戸では、寺中B遺跡５区にSE020、東工区南北線４区で直径が４ｍを超える大型の土坑について井戸とした。布留式期の土師器甕、壺を中心とした遺物が出土し、初期須恵器は見られないため、古墳時代前期の段階のものとみられる。平地式建物１～６と切りあい横断する溝SD208と接続するものであれば、平地式建物１～６は一段階古い弥生終末から古墳初頭の時期である可能性を残す。県調査区ではこの規模を有する井戸は確認されておらず、確証については類例の増加を待ちたい。主幹線３区にSE201・SE205・SE208の３基は一段階前の弥生終末期のSE202、SE203、SE206と隣接しており、異なる時期の井戸がほぼ同じ位置に設けられた状況は、集落の構成内容が弥生時代終末期と古墳時代初頭ではほぼ同質であったことを裏付けるものではないだろうか。

大川跡は西工区及び主幹線１区で開講する地点より北東へ向け、弥生時代と同様の流路を有する。県調査地点よりDN８・DN９が合流する。主幹線２区及び３区では東壁で大川跡の落ち込みを確認するもので、弥生時代の河川幅よりやや狭くなったものとみられる。主幹線５区を通じ、北西方向へ向かうもので、桂・寺中遺跡で確認した大川跡は大きく蛇行した同一の河川跡とみられる。出土遺物では弥生時代終末期から古墳時代前期及び中期に位置する初期須恵器と時期幅を有し、古墳時代前期が圧倒的多数を占める。溝以外で初期須恵器を伴う遺構は西区SE301のみである。

古代

古代の遺構は主に大川跡より東に位置する。建物跡では隅丸方形の掘方を持つ柱穴を配する側柱建物跡と庇を有する建物跡について確認している。東西線２区のSB3302は南北に軸を有する東に庇を有する片面庇建物跡で規模の大きな建物跡である。このほか主幹線１区でSB201・SB202・SB204・



第31図　古代遺構配置図〔S＝１/2,000〕

SB512、東西線１区の東端でSB3301、同じく中程でSB509、東西線３区と南北線３区の交点付近でSB503南北線４区の北端でSB10、SB11と南北に軸を有する建物跡がみられる。SB3301を除くとほぼ南北に同じ軸線上に配置されている。寺中B遺跡４区では建物の東西に庇を有する両面庇建物跡であるSB010を確認しているが、その他には建物跡は確認されていない。東西線の東には大徳川の旧河道とみられる落ち込みがあるため、遺跡の広がりを推し量ることは無理があるが、県調査地点での概況では主幹線１区より南へ離れた建物が密集する地点を建物群Bとし、これより北を建物群Aと区分している。建物群Aについては河跡に沿うように１列正倉型建物跡と南北軸の総柱建物跡が列をなしていることが看取される。河跡の西では建物群Cとした大型の建物跡が河跡に隣接しており、河跡の両岸で河跡に沿って配置されている。市の調査で確認されたSB11・SB10・SB503・SB3301、及び庇付き建物SB3302は建物群Aを構成する一群に含まれるものであろう。県調査地点での建物跡及び既出の遺物等から当遺跡の性格については古代の郡津湊関連の遺跡との指摘がなされており、市で行った調査地点はこの範囲を更に北へ延伸させる結果を導いたと言えよう。

溝・河跡では県調査のDN８が県費分C区に延伸し、主幹線と東西線の間を流下するものとみられ、主幹線２区よりSD240が合流し、主幹線４区及び５区へと延伸する。区画溝と解されるものでは、寺中B遺跡５区SD024、西工区SD306・SD314、東西線３区SD3360などが当該時期の溝跡である。SD3360は掘方・規模共に大きく、河川跡に接続していた大きな区画溝であろうか。西工区SD305・SD306は当該時期の小規模な区画溝とみられる。SD222は後述で中世の区画溝としているが、当該時期の須恵器が出土していることからSD222の開口時期はこの段階にさかのぼる可能性がある。

土坑では、東西線１区SK320が当該時期の地鎮関連遺構とみられる。有台及び底部糸切りを施す土師器椀・皿類が中心で11世紀前半に位置するものとみられ、古代から中世への過渡期段階のものである。この土坑に隣接するSB509をこの土坑と関連付けると、大川跡に接して連なる建物群とは時期が異なる南北に連なる一群の建物の時期を裏付けるものではないか。

大川跡はこの段階で河川跡は機能していたとみられるが、主幹線１区大川跡及びSD240では河川堆積土砂の上位に須恵器類が集中して出土しており、下位から出土する古墳時代以前の遺物の堆積個所と大きな隔たりがあるため、大川跡はほぼ埋没し、浅い落ち込み状になっていたようである。また、SD240は主幹線２区の西壁より出現し合流するもので、大川跡の流路に見られる遺物とは性格が異なることが想定される。墨書を施す須恵器は１区大川跡上層及びSD240でほぼ占められ、この須恵器の年代では８世紀末より10世紀前半の高松窯、末窯より供給される坏身・坏蓋類が大半を占め、土師器椀・皿類の比率は少ない傾向がある。主幹線２区のSD240と地点周辺で河川への投棄が行われたと解釈したい。

中世

中世の遺構は大きく二つに分かれる。寺中B遺跡３区より４区・４－２区にわたり確認された建物跡ではSB004・SB005・SA006・SA007・SB006・SB007・SB008・SB012がある。SB004及びSB006・SB007は総柱建物跡で検出部位が５間×５間を測る規模の大きなもので、うち、SB006とSB007は建て替えによるものとみられる。柱穴の掘方は小さくかつ柱材の輪郭に近い円形を呈するものとなり、小型のものは磁北より０°～15°東へ、大型のものはこれより90°西へ軸を振る傾向がある。主幹線４区ではSA501・SA506・SA504が建物の一部ではあるが、柱列を確認している。SB004、SB006、SA504など東西方向に軸を有するものを主屋とみなせば、南北方向に軸を持つ小型の建物がこれに付属するものであろうか。後述する南に位置する一群とは異なるものとして中世北群とする。

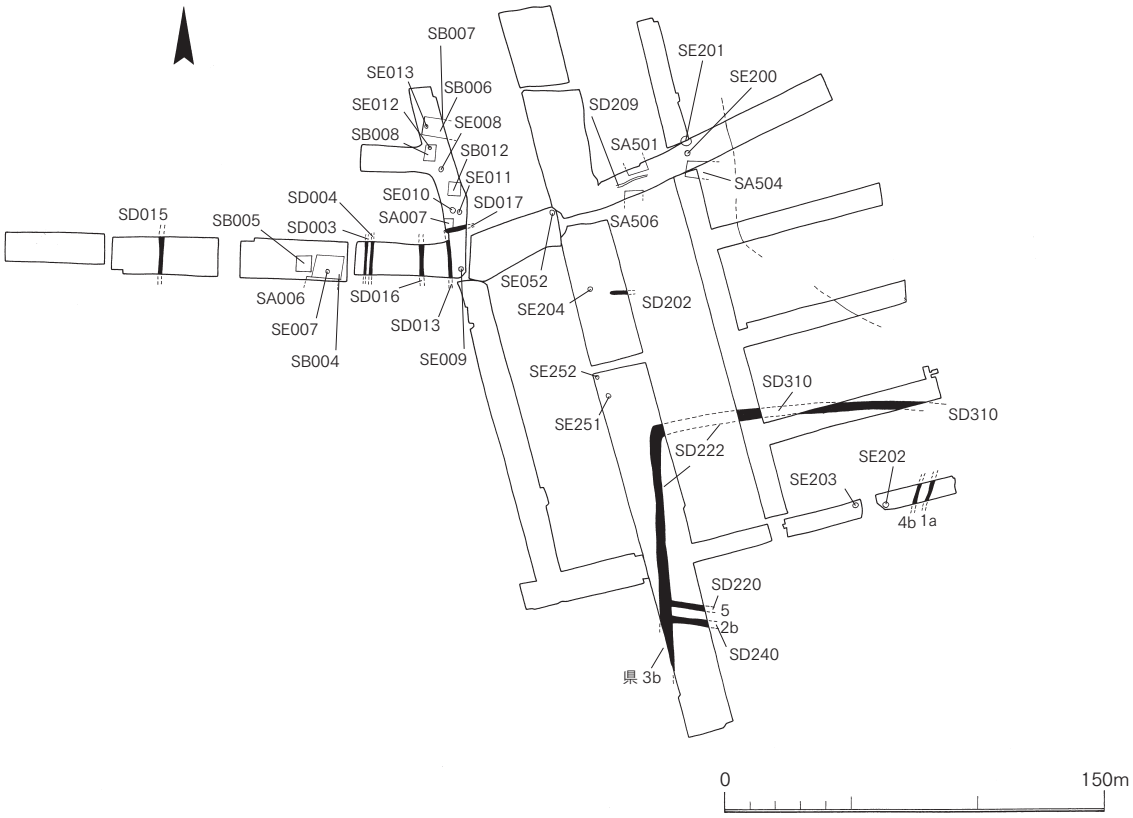
主幹線１区より２区にかけて南北に配するSD222は県調査の３bの延伸にあたる。２区で90°東に

曲がり南北線２区及び東西線１区でSD310と報告した溝は、県報告で大きく囲まれる範囲を形成する堀の一部で、時期は12世紀後半から14世紀と時期幅がある。３b及びSD222の南北長さは約220mに及び、３aは170mであることから南北に長い方形の区画を看取できる。県調査の４bと１aは南北に縦貫する溝でこの２条の溝の間を道と解することができるもので、県費分A区SD202とSD203はこの延伸である。また。主幹線１区のSD240とSD220は県調査区において４bと１aとほぼ直角に交差する５と２bに該当しSD229も県調査のbの延伸である。これら３条はSD222に接続するもので、堀で囲まれた範囲の中の区画を構成するものであろう。このほか、堀の区画内に位置する遺構では県費分A区でSE202、B区でSE203を確認している。

中世北群と堀で囲まれた範囲の間では素掘りの円筒形を呈する土坑のうち井戸としたSE251・SE252・SE204と溝でSD202などがある。建物跡などは確認されておらず、調査範囲をみる限りでは空閑地の様相を呈す。SD202及びSD222の形成をみると、大川跡に切りあい、直線的に軸を持つため、大川跡に接続することは考え難く、大川跡の埋没後、あるいは平坦化した後に溝が設けられたと解釈できよう。大川跡は奈良・平安時代で浅い落ち込みとなり、中世段階ではほぼ消滅している。空閑地であることは大川跡の消滅後、平地化したとはいえ湿潤な土壌を呈すがため、集落等を展開する条件に見合わず、耕作地或いは荒蕪地であったものか。

参考文献

石川県教育委員会　2006　『金沢市畝田西遺跡群Ⅲ』
石川県教育委員会　2006　『金沢市畝田西遺跡群Ⅳ』
石川県教育委員会　2006　『金沢市畝田西遺跡群Ⅴ』
向井裕知　2010　「中世加賀の町場と区画」『都市を切る』山川出版社



第32図　中世遺構配置図〔S＝１/2,000〕

西I区近景

SE301

SX301

SK304・305・306

SK308

SK320

SB301

SB303

写真図版2

SD301

SD302

SD307

SD308

SD314

SD317

SD318

SD318遺物出土状況

SE301（1・2・3）

SK308（9・10）SK315（13）
SK15（14・15）SK320（17・18・19・20）

SD302（24・25・26・27・28・29）

SD302（30・31・33・34・35・36・37）

SD308（89・90・93・95・96）

SD308（60・61・62・63・66・67・68・69）

SD308（78・79・80・82・83・85）

SD317（157）

SD317（159）

SD317（152）

SD317（180・181）

SD317（160・161・162・164）

SD317（205・206・207・208・209・211・212・216・217・219・220・222）

SD317（176・178・179）

SD317（202・203）

SD317（182・183・185・187・188・189・190・191・192・193・194・195）

SD318（250）

SD322（259・260・261・262・263・264・265・266・267・268・269）

SD302（40・41・42・43）

SD308（105・106・109・110・112・113・114・115）

SD310（132）

SD317（229・230・231・232・234・236・238）

SD308（112・117・118・119・120・121・124）

SD308（126）

SD317（196・197・198・199・200・225・226・227・228）

SD302（270・271）

報告書抄録

ふりがな	いしかわけん　かなざわし　うねだ・じちゅういせきXIV
書名	石川県　金沢市　畝田・寺中遺跡XIV
副書名	－木曳野遺跡群－
巻次	XII
シリーズ名	金沢市文化財紀要
シリーズ番号	322
編集者氏名	谷口宗治
編集機関	金沢市埋蔵文化財センター
所在地	〒920-0374　金沢市上安原南60番地　TEL(076)269-2451
発行年月日	平成31(2019)年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うねだ・じちゅう 畝田・寺中	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 じちゅうまち 寺中町、 うねだにし4ちょうめ 畝田西4丁目	172014	県01499 市029	36° 36' 33"	136° 42' 33"	20020715～ 20020920 20030602～ 20031128 20040502～ 20041029	約13,760㎡	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畝田・寺中 遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・ 奈良・平安・鎌倉・ 室町	掘立柱建物跡7棟 溝跡22条 井戸/土坑跡9基	土師器 須恵器 陶磁器 木製品 石製品	

要約

平成16年度に調査した東西の区画道路のうち、西側の調査区について報告。掘立柱建物跡、平地式建物跡、井戸跡、溝跡等を検出した。SD308およびSD317は弥生後期から古墳時代初頭の土器が定量出土する環濠と考えられる。SB301は平地式建物で建て替えを確認でき、14年度調査で確認した建物跡を含め集落域を形成するうちの南限を示すものとみられる。

石川県　金沢市

畝田・寺中遺跡XIV

－木曳野遺跡群XII－

『金沢市文化財紀要』322

平成31年3月28日発行

発行　金沢市

編集　金沢市埋蔵文化財センター

〒920-0374　石川県金沢市上安原南60番地

TEL (076)269-2451　FAX (076)269-2452

印刷　有限会社　オフィス山崎

〒920-0373　金沢市みどり1丁目48番地

TEL (076)259-1126